



ゾディアック・ラブ・
ウォーズ

森水鷺葉

第1話 牡羊座の巻

たくさんの星が、またたいていた。

草場守（くさばまもる）は、自分が広大な宇宙空間にいると気づいた。

そして、その星々の間に線が連なり……十二の獣と人の姿となった。

（ああ、十二星座だ）

牡羊座、牡牛座、双子座、蟹座、獅子座、乙女座、天秤座、蠍座、射手座、山羊座、水瓶座、魚座。

誰もが知っている、黄道十二宮の星座たちだ。

けれど。

それらは、実体化して、こちらに迫ってくる。

「え……」

そして、すごい勢いで、守の身体中に喰らいつき、引っ張り始めた。

「や、やめ……」

息ができなくなる。いや、宇宙なんだから当然か。

そう、思う間もなく、身体がバラバラに引き裂かれそうに一。

「やめろおおおおおおおおおおおっ!？」

朝だった。

鳥が鳴いていた。

宇宙空間なんてどこにもなく、ここはベッドの上だった。

「あ、夢……」

守は間の抜けた声をあげて、のそのそとベッドから起き上がる。

次の瞬間、目覚ましが鳴った。

スヌーズ機能だった。

「え、ちょ、この時間!？」

慌てて起き上がって、パジャマを脱ぎ捨てて、真新しいブレザーに着替える。

手ぐしで髪を整えながら、2階から階段を走り降りる。

「母さん、なんで起こしてくれなかったんだよ!」

「え、なんで?」

「なんでって、今日、入学式……!」

「あー……」

母は、経済新聞から顔を上げて言った。

「忘れてたわ」

「行ってきます!」

飛び跳ねるように玄関を飛び出して、守は学校に向かった。

（ああ、どういうことだよ、晴れて高校デビューのつもりだったのに）
ベタではあるけれど、そう思っていた。

やや小柄な体格で、顔も人並み。クラスでもそんなに目立たない存在。

そんな自分も、高校に入れば、変わる、変われると思っていた。

それなのに、謎の悪夢で予定が狂いつつある。

入学式から遅刻して目立つなんて、最悪だ。

「なんだったんだろ……っと、それより……」

「遅刻遅刻ーッ！」

女の子の声がした。

いきなり、角の道から、女の子が飛び出して、そして。

「うごっ」

「あうっ!？」

鈍い音がした。

守と、女の子の頭が、思いっきり激突したのだった。

「『火の星座 活動宮の魔法 金毛羊の頭突き』……やるな」
別の女の子の声がした。

「……だ、大丈夫？」

痛みをこらえながら、女の子に訪ねると、彼女は守を睨みつけた。

赤みがかった明るい髪と、ピンと立った前髪が特徴的な少女だった。

「よくも邪魔したわね！ あたしは王子様にぶつかろうと思って、この魔法を使ったのよ！」

「魔法!? 何の話!？」

そんなやりとりをする2人を、少し離れた電柱の陰から見守る3人の少女たちがいた。

小柄なショートカットの少女は、何を考えているかわからない無表情で様子を見ている。

長身で、つややかな長い黒髪の少女は腕を組んでいる。さっき「金羊毛の頭突き」についてつぶやきをもらしたのは彼女だ。

豊かなバストとくびれた腰、ふわふわの髪の少女は、慌てたように言った。

「ちょ、待って、日灯（ひかり）ちゃん、もう王子様と接触してるじゃない！」

「安心しろ。この魔法には欠点がある」

先ほども、「魔法」のことを言った長身の子が、ふわふわの子に言った。

「え、欠点って？ なにそれ？」

「使った本人は相手のことを運命の相手だと、その直後には認識しえないのさ」

長身の子が肩をすくめてみせる。

「え、じゃあ、私たちにもまだチャンスあるってこと？」

ふわふわの子の表情がみるみる明るくなる。

「やったあ！」

「とはいえ、十二星座の魔法は、順番にしか使えない。つまり、次は牡牛座、土の魔法だ」

ふわふわの子に念押しするように言って、長身の子は小柄な子の方を見た。

「……」

小柄な子は、無表情なままで、守たちを見つめている。

「ええっ、それだと、私が魔法使えるのって四番目ってこと!？」

「まあ、それはあらかじめ決まっていたことだがね。私も三番手だ。そう焦りはすまい」

またショックを受けているふわふわの子に、長身の子が言った。

「風見（かざみ）ちゃん、でもちょっと挙動不審じゃない？」

軽く、その肩が震えているのを見とがめて、ふわふわの子が長身の子に言った。

「……同意」

小柄な子が振り向いてうなづく。

「うるさい」

風見とよばれた長身の子が、かぶりを振って言った。

「ああ、もう、あんたなんかにかまけてられないわ！」

ぶつかった少女は、守の身体を突き飛ばした。

「あたしは、王子様に会いに行くのよ！」

「あ、待って！」

その瞬間、彼女のカバンからハンカチが落ちた。

守は、慌てて、それを拾い上げ、埃を払って後を追う。

少女は振り向かない。

守が、手を伸ばし、彼女の肩にふれようとしたところで……。

「うわっ!？」

「きゃわあ!？」

守は勢い余ってつんのめり、その拍子に少女のスカートを掴んで一緒に転ばせてしまった。

「こ、この……」

「あ、いや、これは……っ！」

慌てて身をひるがえすと、少女は地面に膝をついたままの守を睨みつける。

「サイッター!!」

骨と骨のぶつかる硬い音が響いた。

少女は、守の顔面を拳で殴りつけたのだ。

「……ッ！」

地面に転がる守を背に、少女は全速力で走って行ってしまった。

白と水色のストライプが、目に焼き付いて離れない守だった。

こうして、結局、守は遅刻しつつ、入学式へと向かった。

入学式の中、途中で入っていった守に視線を送るものはいたが、多くは特に気に留めていない様子だった。

（ああ、やっぱり、こんなもんなのかな）

変な注目を集めず、安堵しつつも、そういうふうにも思う。

自分なんて、しょせんは、その程度の存在なのだと。

この時の守の思いは、新学期最初のホームルームの時間に裏切られることになる。

担任の先生は、二十代後半から三十代前半くらいの女性だった。

自己紹介もそこそこに、先生は宣言した。

「このクラスではゾディアック・ラブ・ウォーズを受け持つことになりました」
クラス全体がざわつき始める。

「ちょ、入学式で言ったアレか！」

「マジかよ、うちのクラスなわけ？」

「え？」

周囲の様子から、入学式で出た話題に関する反応だとわかるものの、守にはなんのことだかわからない。

（そうか、俺、遅刻してきたから……）

クラスのざわめきを前に、先生は言った。

「えーと、先生、基本的によくわからないので……。自由にやっちゃってください」
いかにも無責任な発言。

「しまった、このクラス、学校側から放置されてるんだ！」

「しょうがねえよ、理事長の判断だし」

「先生、ちゃんと授業はしてくれないと困りますよ!？」

クラスメイト達のそれぞれの反応に、守は呆然とする。

わけがわからなかった。

「ゾディアック・ラブ・ウォーズって……何？」

自分だけがわからない。

そこに、3人の少女が、教壇へと立った。

髪の長い長身の子と、ふわふわ髪の子、そして、小柄なショートの子だった。

「私は五十嵐風見（いがらしかざみ）。このゾディアック・ラブ・ウォーズで、風のエレメント代表として参加する者だ。よろしくな」

長身の少女――風見は、主に守の方に視線を向け、宣言した。

「私は、水田夢子（みずた・ゆめこ）。水のエレメント代表です。……絶対に負ける気はないから、よろしく！」

夢子と名乗ったふわふわ髪の子が、真面目な表情を作っていた。

「……土井（どい）。土のエレメント。よろしく」

小柄な少女が、それだけ言った。下の名前は名乗らなかった。

「とりあえず、入学式でも先生方から説明があったとおりだが、ここで、ゾディアック・ラブ・ウォーズの概要をおさらいしておこう。我々、当事者から説明するのが筋だろうからな」

「あと、たしかさっき、入学式で……」

「ああ、彼は遅れて入ってきたからな」

風見と夢子の会話に、守がどきりとする。

「え、それって……」

「ゾディアック・ラブ・ウォーズは、4つのエレメント……火、土、風、水を司る4家の魔術師が、どのエレメントがこの地域を支配するかをめぐる戦いだ。この戦いは、周期的に何回か繰り広げられており、星のめぐりの、今回、この年のこのクラスが選ばれた」

風見が、守に視線を合わせながら言った。

「ゾディアックというのは、十二星座のことだ。黄道十二宮。星占いでおなじみの、あの星座だな。私達は、それぞれ、その星座にちなんだ魔法が使えるんだ。そして、私達、魔術師の力を最も大きく増幅させる存在。それが……」

「草場守君！ あなたなのよ！ そして、この力の増幅は恋愛によってなされるの！」

風見の言葉に続いて、胸の前で両手を組んで、夢子が熱をはらんだ声で言った。

「魔法……れ、恋愛!？」

「そう、恋愛よ！ 私達のうちの誰かと恋愛することによって、大きな魔法の力が生まれるの。その強大な力を巡っての愛の戦い……それこそが、ゾディアック・ラブ・ウォーズなのよ！」

夢子の瞳が輝いている。

それは、恋に憧れる少女のものなのかもしれないが、守には、なんだか脅威のようなものを感じられた。

守が目を白黒させていると、教室の扉が派手な音を立てて開いた。

駆け込んできたのは、守が通学路でぶつかった、あの少女だった。

「あたしの王子様は!？」

教室が静まりかえる。

皆が、入ってきた少女と、守を交互に見ていた。

「へ、あたしの王子様って……」

「あはは……」

守は、呆けたような笑みを浮かべた。

「遅かったじゃないか、日灯（ひかり）」

「あ、日灯ちゃん、頭に怪我してる？」

「そう、ちょっと保健室に……たいしたことないって言われたけど」

風見と夢子に言われ、少女――火野日灯（ひのひかり）は、額を押さえながら答えた。

湿布のようなものが貼られている。

「牡羊座が司る身体部位は頭だからな。対象に頭から激突するというのは、いかにも勢いが命の火のエレメントらしいというか……日灯らしいな」

「うるさいわよ、風見！ ……って、そんなことより！」

日灯は、つかつかと、守の席へと近づいていった。

「え？」

「あんた、ハンカチ返しなさいよ！」

「う、うわあ、返すつもりだったよ!？」

日灯は、また、守の顔面を殴ると、差し出されたハンカチをひったくった。

「……後で洗わなきゃ」

日灯は、お礼も言わずに、自分のカバンにハンカチを乱暴に突っ込んだ。

「ねえ、怪我は……」

「平気って言ってるでしょ！ だいたい、あんたに心配される筋合いないわよ！」

日灯が、全身から発するイライラを守にぶつけてくる。

「まさか、こんな奴とあたしが……。あたしの魔法は、もっと、素適な運命の出会いになる予定だったのに！ どうしてこんな奴なんか！」

日灯はぶつぶつとつぶやくと、とっとと自分の席へと行ってしまった。

そして、その後は、守には視線を一切合わせず、机に肘をついて、不機嫌な表情で黙ってしまった。

「やれやれ」

日灯と守のやり取りに、風見が、おおげさに肩をすくめてみせた。

「こ、これが、日灯ちゃんの恋愛フラグ？」

夢子が、はらはらした表情で言う。

「ツンデレなヒロインと、それに振り回される主人公……そんな、ラブコメの王道的な展開!？」

ま、まさかね。そんなこと、あるわけないわ。だって、草場君は、私と……」

夢子が、がくがくと震えながら言う。まるで、恐ろしい物を見てしまったかのように。

「落ち着けよ、夢子。……って、聞いてないな」

風見の隣で、夢子が目をぐるぐるさせていた。

「……」

土井は、無言で日灯と守を見つめている。
何か、考え込むような、真剣な表情で。

「あ、あの……」

守は、ただ、混乱していた。

魔法とか、恋愛とか、あまりにも唐突すぎる話題ばかりで、しかも、自分が、その中心に据えられているなんて。

とにかく、高校生になって、草場守という人間の人生が、大きく変わろうとしていることだけは、確かなようだった。

それが、自分の望んだようなものかどうかは、ともかくとして。

第2話 牡牛座の巻

自分の身に降りかかってきたことに、処理能力が追い付かず、呆けている守のところに、見知った人物が現れた。

「よお、草場」

「鈴木！」

守の中学時代の同級生の男子生徒、鈴木であった。

「なんだか、いきなりわけわかんないことになってるな。俺もびっくりした」

「うん……」

うなだれる守の肩を、鈴木がポンポンと叩く。

「でもさ、あんなかわいい女の子4人に迫られるなんて、ハーレムじゃないか。うらやましいぜ」

明るく言った鈴木に、守は恨みがましい視線を向ける。

「ほんとにそう思うのか？」

「おまえ、彼女ほしくないのかよ？」

「そりゃほしいけどさ……」

こういう形式を望んでいたわけではない。

「でも、悪い気はしないだろ？ せっかくだし、この状況を楽しめばいいじゃないか。人生で一番のモテ期かもしれないだろ」

「うーん、そうか……」

守と鈴木がそんな会話をしていると、担任の先生が声をかけた。

「じゃあ、適当に班決めておいてくださいねー」

「また丸投げかよ！」

先生の発言に、誰かがツッコミを入れた。

「えっと……」

なんとなく、守はクラス内で浮いた存在になってしまっている。

それはそうであろう。ゾディアック・ラブ・ウォーズの争奪戦相手として、皆の前で紹介されてしまったのだから。

「なあ、草場。俺と同じ班になろうぜ」

「鈴木……うん」

鈴木は、中学時代からいい奴だった。

なんとなく、クラス内で、こういうふうになってしまっている者にも、さりげなく話しかけたりして。皆が、なんとなく雰囲気よく、過ごせるように気を使ってくれるのだ。

「じゃあ、後は……」

鈴木が、周囲を見回した。

「よし、では、私も同じ班になろう」

風見が、守達の近くにやってきていった。

「待って！ 私も同じ班になる！」

「ちょ、抜け駆け禁止！」

「……私も」

夢子と日灯と土井も、守のところにやってきた。

「これで6人かあ。草場、これでいいか？」

「あ、うん、俺は……」

守は鈴木に問われて、4人の顔を見回した。

ちょっと断れそうにない。

「でもさ、男女比は3人ずつにしないといけないんじゃないの？」

日灯が言った。

まだ、どこことなく不機嫌そうな感じがする。

「夢子、別の班になったら？」

「えー!? ひどいよ日灯ちゃん、私を仲間外れにする気!？」

夢子が、涙目になって抗議する。

「いや、先生、適当でいいって言ってたし。俺達6人でいいんじゃないか？」

鈴木が、まあまあ、と仲裁に入る。

「あ、じゃあ、俺と、鈴木と、4エレメンツの皆ってことで」

守も、鈴木に同意する。

「4エレメンツ？」

日灯が怪訝そうな顔をする。

「うん、4つのエレメントなんだろ？ だから4エレメンツ」

「変なあだ名つけないでくれる？」

日灯が守に抗議する。

「まあ、別に私はかまわないよ。ふふ、なかなか面白い」

「風見ちゃん……まあ、いっか」

くっくっと笑う風見に、夢子も苦笑した。

「……4エレメンツ」

土井が、反芻するように言った。

そうするうちに、昼食の時間となった。

「あ、しまった！」

守は、周囲を見回して叫んだ。

「今日って、午前中までだと思ってた……」

「オリエン午後まであるぞ。パンでも買いに行くか？」

鈴木に連れられ、守が席を立ったところ。

「……」

廊下に待ち構えていたのは土井だった。

「え、土井さん？」

土井は、守の腕をぐいっと引っ張ると、走り始めた。

「あーれー!？」

「あー、拉致られてったな」

鈴木が、それを見送った。

守が連れてこられたのは、家庭科室だった。

「ここって……？」

「……実は、レンジもある」

土井は、かわいらしい弁当箱を差し出した。

さらに、土井は、水筒からみそ汁を出して、鍋にそそぐ。

「簡単だけど……温めなおすだけ」

「自分で作ったのか？」

土井は、こくり、とうなずいた。

みそ汁が温まると、土井が、守にお椀を差し出した。

「あ、美味しい……」

うまくダシが効いていて、素材の味が引き立てられている。

「……」

土井が、守を見て、初めて笑みを浮かべた。

(うわ……)

守は、土井の表情に、しばし見入ってしまった。

(こんなにかわいいんだ)

無表情なので気づかなかったが、土井は、本当はものすごく美少女なのだ。

家庭科室の入り口にて。

中の様子を、残りの3エレメンツが覗き込んでいた。

「むむー、土井ちゃんのヴィーナススマイルだよお……」

「牡牛座の支配星、金星……ヴィーナスの力、か。しかしあれは、土井自身がわかってやっているか不明な点がやっかいだよな」

「ちょ、王子っつーか、ヘタレ王子は何、ニヤけてんのよ!？」

夢子、風見、日灯が、三者三様のコメントをする。

こうして、家庭科室の入り口で見張る3人に、鈴木が声をかける。

「おまえら何してんの？」

鈴木も、中の様子をひょい、と覗き込む。

「あ、やっぱ草場達か。気になるなら入れればいいじゃん」
おーい、と声をかけて、家庭科室に入ろうとする鈴木だが。

がつん、と、音がした。

「な……ここ、何もないよな？」

鈴木が、家庭科室の入り口の中空をまさぐる。

「なにこれ？」

「バリアが発動してんのよ」

日灯が、いらだたしげに言った。

「魔法が発動している間は、他の誰も邪魔できないのさ」

「うん、結界みたいなものが作られてるの。牡牛座の魔法のね」

風見と夢子も口々に言う。

「これが、ゾディアック・ラブ・ウォーズのルールということだ」

「だから、日灯ちゃんの魔法の発動時も邪魔できなかったんだよー」

「ああ、今は牡牛座のターンだからな」

「くやしいけど、あたしはまた獅子座が回ってくるまで待つしかないの」

日灯もそう続けた。

「十二星座って、たしか順番あったよな。そういうことか？」

鈴木の問いに、3エレメンツがうなずいた。

「十二星座は、牡羊座、牡牛座、双子座、蟹座、獅子座、乙女座。天秤座、蠍座、射手座、山羊座、水瓶座、魚座の順なのは知っているね？ そして、それぞれの星座は、4つのエレメントに対応しているんだ。たとえば、風の私なら、双子座と天秤座、水瓶座の魔法が使える。そして、風のエレメントが司るのは思考だ」

風見が、解説する。

「あたしは火だから、火のエレメントの牡羊座、獅子座、射手座ね。火が司るのは直観」

日灯が続ける。

「私は水のエレメントで、蟹座と蠍座と魚座。水が司るのは感情。そして、土のエレメントの土井ちゃんは、牡牛座と乙女座、山羊座……感覚を司る魔法が使えるの」

夢子が、言い終わり、頭を抱えた。

「今、発動中なのは、『土の固着宮の魔法 ラブラブ・ヴィーナス・クッキング』なのよーっ！ このままじゃ、土井ちゃんの手料理で、草場君が落とされちゃう！」

「『ラブラブ・ヴィーナス・クッキング』……!？」

衝撃的な魔法名に鈴木が苦笑する。

「あ、でも、その『土の固着宮』とかいうのはなんだ？」

「ああ、そのことか」

鈴木の問いに、うなだれる夢子に代わって風見が解説する。

「星座には4つのエレメントのほかに、3つのクォリティというのが存在するんだ。それが、活動宮、固着宮、柔軟宮の3種類だ。活動宮は季節の始め。勢いのよさ、始まりを象徴する。固着宮は季節の盛り、どっしりとかまえ取り組むことを象徴する。そして、柔軟宮は、季節の変化するとき、状況によって変化することを象徴している。この3クォリティは、それぞれのエレメントにひとつずつある。たとえば、牡羊座なら、火の活動宮。春の始まりを意味する。そして、ここで展開されている牡牛座は、土の固着宮だ」

「なるほどな……全員、3種類魔法使えるってことか」

「そういうことになるな」

鈴木に、風見がうなずいた。

そうしているうちに、家庭科室内では。

「すごいな、土井さん、こんなの作れるなんて」

「……」

守が、土井の弁当にしきりに感心していた。

実際に、土井の弁当は、見た目も美しく、栄養バランスも考えられていて、なにより、とてもおいしかった。

黙ったままではあるが、土井も、守がおいしそうに弁当を食べるのをうれしそうに見守っている。

ふと、その瞬間。

土井は、守の口元についたご飯粒を、キスで取った。

「うわあああ!？」

守は赤面して口元を覆う。

「な、なん……」

土井は全く動じた様子もなく言った。

「……おいしい」

家庭科室入り口では。

「あいつ、あいつ、許せん！」

日灯が、今にも殴りかからんばかりの勢いで叫んでいた。

「わーん、ひどいよー！　こんな、こんな抜け駆けするなんて！」

夢子も、涙目になって抗議の声を上げる。

一方、風見は。

「おや、ヘタレ王子はどうでもよかったんじゃないのか、日灯」

「風見こそ、笑顔が引きつってるけど、何、余裕ぶっこいてるの!？」

「わ、私は別に……」

風見は、咳払いしてごまかした。

「なんでもいいけど、あいつうらやましいな、ほんとに……」

鈴木が、心の底からの言葉を口にしていた。

「だが、牡牛座の管轄の身体は口だ。だから、ああいうことも許されるんだろうな」

「そうよね……。身体部位を絡めた魔法を使うのって、けっこう難易度高いけど」

キスへの動揺を隠そうとするのか、風見が理性的な発言をしたのに対し、夢子がうなずく。

「まあ、日灯みたいな例もあるがね」

「ちょっと、風見、それどういう意味!？」

頭突きのことを持ち出されて、日灯が風見を睨みつけていた。

「ま、まだ、逆転のチャンスあるよね。だって、私まだ何の魔法も使ってないし」

夢子が、自分に言い聞かせるように言った。

一方、家庭科室内にて

「あの、土井さん……」

「お弁当」

土井が、守を見上げて言った。

「う、うん」

「……よかったら、また作ってくる」

「あ、うん、ありがとう」

守は、それだけ言うのがせいっぱいだった。

まだ、口元に、柔らかい唇の感触が残っている気がする……。

土井は、また、ふっと、やわらかく微笑んだ。

「よかった。草場君、喜んでくれて」

「土井さん……」

守は、なぜ、土井が自分にここまでしてくれるのかわからなかった。

しかし、ここまで女の子にストレートに好意を寄せられるのは、おそらく、生まれて初めてのことだ。

(ゾディアック・ラブ・ウォーズ、かあ……)

守は、この状況の原因となった、その戦いについて、想いを馳せた。

そして、ふと、朝に見た夢のことを思いだした。

十二の獣が、自分の身体を引き裂いてしまう、というあの夢のことを。

宇宙空間で、十二の獣が、襲い掛かってくるあの夢。

まるで、守の争奪戦をする、4エレメンツを象徴するかのような。

（あれは夢の予兆……なんてわけないか。だって、俺は普通の人間のはずだし）

守は、自分に言い聞かせるように、そう思った。

「……草場君？」

「あ、ごめん、ぼーっとして。いただくよ」

箸が止まった守を怪訝な顔で見ていた土井に気づいて、守は、残りの弁当をかきこんだ。

甘い玉子焼き。

アスパラの肉巻き。

そして、ふっくらした白いご飯。

さっきと同じく、弁当は、とてもおいしかった。

第3話 双子座の巻

こうして、昼休みと、午後のオリエンテーションが終わり、守は帰りの支度を始める。

(大変な一日だったなあ.....)

それぞれの魔法の特徴についての説明は、昼休みの終わりに、鈴木が守に伝えてくれていた。鈴木に土井にキスされたことを冷やかされたが、そのことを思い出すだけで、顔が熱くなる。

そうしていると、風見が、守の近くに寄ってきている。

「ちょっと、話がある。屋上まで来てくれ」

「え.....」

囁くように言われて、守はどきりとする。

(屋上.....?)

2人で話がしたいということだろうが、まさか。

しかし、これまでの展開から、守でも、察しがついた。

(も、もしかして、告白.....!?)

これまでの日灯や土井の「魔法」も、十分にドキドキさせられるものだった。

しかし、今度は、もっとストレートな、さらに恋愛らしい魔法かもしれない。

(五十嵐さん.....)

これまで、なんとなく、客観視点からの態度や発言をしているように見えた五十嵐風見が、何を考えているのか。守にはわからなかった。

それでも。

風見が、自分と向き合おうとしてくれているなら。

そう思って、守は、教室を後にした。

屋上は、日の光がよく当たる、気持ちの良い場所だった。

暖かい春の風が吹き抜けていき、心地よい。

風見は、奥のフェンスの前に立って、景色を眺めているようだった。

「お、来たね」

風見が、守に向かって振り返る。

やわらかな笑み。

しかし、次の瞬間。

風見は、守に向かって走り始めた。

「え.....?」

そして、硬直する守の顔面に向かって、思いっきり、エルボードロップを喰らわせたのだ。

「ゴブッ!？」

守は、たまらずその場にくずおれる。

おお、と歓声が上がった。

屋上に守が呼び出されたのに気付いた、鈴木と、日灯、土井、夢子達が、こっそりつけてきていたのだ。

「これ、読んでくれ」

エルボーで倒れた守に、風見は手紙を差し出した。

白い封筒に、ピンク色のハートのシールが貼ってある。

「な……」

顔面を押さえて、どくどくあふれる鼻血を止めようとしていた守は、あまりのことに、またも硬直した。

「返事、待ってるから。じゃあな」

風見は、守の空いている左手に手紙を押し付けると、身をひるがえした。

「『風の星座 柔軟宮の魔法 エルボー&ラブレター』。双子座の管轄となる身体部位は腕、そして、司るものは言葉だ」

風見が、守の傍を通り過ぎざま、そうつぶやいたのが聞こえた。

「ほら、おまえら、邪魔だ」

屋上の入り口にいた鈴木と3エレメンツは、風見に押されて、道を開けさせられる。

「……」

屋上に取り残された守は、ただ呆然として、手紙を受け取ったままの姿勢でいた。

やがて、一陣の風が吹き抜ける。

守を、夢から覚ますかのように。

「五十嵐さん……」

守は彼女の名を呼んだ。

ラブレターだ。

正真正銘の、本物のラブレターだ。

「草場守君へ」

表にはそう書かれている。

裏には、「五十嵐風見」のサイン。

「……本物だ」

そう、これは、正真正銘の愛の告白である。

守は、手紙を汚さないよう、傷つけないよう、細心の注意を払って開封した。
そこには、きれいな便箋に、知性を感じさせる文字が並んでいた。

「草場守君へ

突然のことで驚かせてしまったと思います。

こうしたやりかたでしか、手紙を渡せない自分は臆病だと思います。ごめんなさい。

さて、本題ですが、私は君のことが好きです。

出会ったのは今日がはじめてですが、こんな感情が自分に芽生えると思いませんでした。

ゾディアック・ラブ・ウォーズは、恋愛の強力な儀式魔法です。

あるいは、私自身、それに捕らわれているのかもしれませんが。

でも、それでもかまわないんです。

私が、生まれて初めて、恋愛感情を誰かに抱き、それを伝えることができるのですから。

草場君は、私達のぶしつけな態度に、混乱は示しても、けして怒ったりはしませんでした。

本当は、私達……いえ、少なくとも私自身は、拒絶されることが怖かったのです。

しかし、当然のことながら、巻き込まれたことへの怒りを示される場合もあると聞き及んでいます。こうした場合、対象となった者も、魔法をかける側の魔術師も、深く傷つくのだと。

でも、草場君は、そうではないと感じました。

草場君なら、もしかしたら、私の想いを受け止めてくれるのではないかと思いました。

草場君が優しい人なのは、今日一日のことだけでよくわかりました。

だから、自分の気持ちをまとめて、伝えるのには十分だと思ったんです。

草場君が、私を選んで、お付き合いしてくれますように。

五十嵐風見」

手紙からは、これまでの風見の態度からは感じられなかった雰囲気があった。

年頃の女の子の、恋への戸惑いや、それを伝えることへのためらい。

男言葉で話し、冷静に、理知的にふるまっている、風見とのギャップに、守は驚いていた。

（俺にだけ、伝えてくれたんだ）

そう考え、直後、思い上がりかもしれない、とも、思った。

いや、しかし、たしかに、これは、風見が守にだけ伝えた気持ちなのだ。

「五十嵐さん……」

守は、もう一度、彼女の名を呼んだ。

「騙されるな！ ヘタレ王子！ 風見はなんていうか、すごいズルい奴だ！」

「うわーん、草場君ーッ！」

「……」

日灯と夢子と土井が、ラブレターを見つめている守に、やきもきしている。

しかし、双子座の魔法の効果で、直接近づくことはできないのだった。

そして、帰り道。

「おーい、草場。一緒に帰ろうぜ」

夢うつつのようにぼんやりしている守のところに、鈴木が駆け寄ってきた。

「鈴木……」

守は、すぐるような目で鈴木を見つめた。

「なあ、どうしたらいいと思う？」

「どうしたらって……」

鈴木は、苦笑を浮かべた。

「返事してやれよ。うらやましい奴」

「え……」

どきりとする。そう、風見は、守の返事を待っているはずだ。

「ただでさえ4人の女の子に同時に好意寄せられて大変なのはわかる。でも、お前が受け取ったのはラブレターなんだろ？」

鈴木言葉に、守は、自分に言い聞かせるように頷いた。

「そうだよな。これは、五十嵐さんがちゃんと書いたものだし、俺もきちんと返事すべきだよな……」

こうして、帰り道、話しながら歩く男子2人に対し。

日灯、夢子、土井は、離れた場所からそれを見守っていた。

「何話してるのよあいつら……」

「鈴木君、余計なこと言わないでーっ！ なんだか草場君が神妙な表情になってるじゃないのーっ！」

「……」

日灯は睨みつけるような視線を送り、夢子が、大げさにふわふわの髪を振り乱してわめく。

土井は、いつも通りの無表情だったが、守から片時も視線を逸らさなかった。

「よお、お三方」

そこに、風見が追い付いてきて、3エレメンツの後ろから声をかけた。

「風見！ てめえ！」

風見のにやにや笑いに、日灯が怒りをあらわにする。

「フッ、これで、私が一步リードのようだな。ゾディアック・ラブ・ウォーズの勝者も、これで決まったも同然と思わないかね。草場君も、私の魔法によって、私の方に振り向いてくれたはずだ」

髪をかきあげながら言った風見に、日灯がグーで殴りかかる。

「だからおまえは嫌な奴なんだよ、この！」

しかし、それを風見はひらりとかわす。

「はは、今は風のターンだよ、日灯」

「この野郎……！」

剣呑な雰囲気の日灯に、風見は全く動じた様子を見せない。

「……照れ隠し」

ふと、土井がつぶやいた。

「えっ」

風見が、土井の方に振り返る。

土井は、いつも通りの無表情だった。

「うん、今のこれって、照れ隠しだよ、風見ちゃん」

土井の発言に、夢子が、うんうん、とうなずく。

「ち、違うぞ、私は」

風見が否定する。

先ほどまでの自信と余裕はどこかへ行ってしまったようだ。

「風見ちゃん、素直じゃないもんね。いつも理屈っぽいことばかり言って。でも、本当はさびしかったりとか。昔からよくあったもんね」

「何言ってるんだ夢子！」

日灯も、動揺する風見を見て、はは一ん、という表情になる。

「そういやそうだっけ」

日灯が、立場逆転したのを確信して、畳み掛ける。

「どんな顔してラブレター書いたんですか、五十嵐センセー？」

「ち、ちがうぞ、違う違う違う！」

風見が瞬く間に真っ赤な顔になって否定する。

「君達は勘違いをしている！ 私は単に戦略的に重要な行動をしたまでであって、そのような感情、て、照れなどの感情を抱いたりしてはいない！」

「なにそれ、わかりやす」

日灯に吹き出されて、風見は両手を振り回した。

「自分の気持ちに正直にならないのはよくないよ、風見ちゃん」

「……同意」

夢子が諭すように言い、土井もそれにうなずく。

「ち、違う違う違う！ 違うって言っているだろう！ 私の話を聞け！」

完全に冷静さを失った風見は、そう、絶叫したのだった。

そんなことを4エレメンツが繰り広げているとは知らずに。

守は、鈴木と一緒に帰っていった。

そして、ラブレターに対して、誠実な対応をしようと心に決めていたのだった。

自宅に戻り、緊張した面持ちのまま、守は2階の自室へと戻る。

そして、カバンの中から、風見にもらった手紙を取り出して、机の上に置く。

「草場守君へ」

その文字が目飛び込むだけでどきりとする。

「五十嵐さん……」

再び、ラブレターを読み返そうとするが、広げた手紙を、守は正視することができなかった。

「どうしよう、俺も返事……」

自分も手紙を出すべきだろうか。

それとも、どこかに呼び出して、返答を伝えるべきか。

いや、そもそも……。

「俺、五十嵐さんのこと、どう思っているんだろう」

わからなかった。

今日初めて会ったばかりだということもある。

しかし、それだけではないような気がした。

風見自身も、出会ったばかりでも、さほど問題がないという趣旨のことを伝えていた。

それよりも、なによりも。

自分の感情をまとめることが、守には、まだできなかった。

風見のことも、もちろんだが、他の3人、朝、ぶつかってきた日灯のこと。

お弁当を食べさせてくれた土井のこと。

そして、やはり自分への好意を持っているだろう夢子のこと。

守は、ぐるぐると考え続けた。

「俺も、五十嵐さんみたいに、自分の気持ちを、うまく、言葉にすることができればいいのにな……」

守は、夜空を見上げながら、そう、つぶやいた。

都会でも、校外ならば見える、明るい星が、きらめいていた。

(これが、風の魔法なのかな)

自分の心をとらえて離さない、大きな力。

これが、風見の魔法なのかもしれない。

いまだ直視できない、ラブレターを前にして、守は、そう、思ったのだった。

第4話 蟹座の巻

翌日、学校に行った守は、学校中から注目の的になっていた。

「ほらあれが、草場守？」

「ああ、なんとかラブ・ウォーズの……」

通り過ぎる生徒達が、守の方を振り返る。

（聞こえてるんですけど）

ひそひそと噂しあう生徒達に、守はうなだれた。

（俺、うまくやっていけるかな）

憂鬱な気持ちのまま、教室に向かう。

しかし。

「おはよう、草場」

クラスメイトの男子が、教室の入り口ですれ違いざま、守に声をかけた。

「あ、おはよう」

守は、意外な普通の挨拶に、すこしあっけにとられる。

教室に入ると。

「おはよう、草場君」

「おはよっ！」

「……おはよう」

女子生徒2人が、やはり、自然に挨拶してくれた。

守のクラスでは、すでに、受け入れムードが進行しているようだった。

そういえば、先生の宣言に対しても、クラスの順応性は高かったような。

自分の席に着くと、鈴木が隣の席で出迎えてくれた。

「おかえり」

鈴木が、微笑を浮かべて守に言った。

守は、ようやく、ほっとして席に着いた。

「なあ、鈴木……」

守は、昨晚からずっと考えていたことを話し始めた。

「どうしたらいいんだよ」

「別に、普通にすれば？ おまえの選択なんだし」

鈴木が、あっけらかんと答える。

「そんなこと言われても……」

「だいたいさ、おまえは今まで、自分の決断で何か決めたことがあるのか？」

「……」

鈴木に、真面目な表情で言われて、守は考え込んだ。

「……あるよ」

「たとえば？」

「学校、俺がここ選んだんだし」

「ふーん」

「な、なんだよ」

「別に。俺がおまえの立場だったら、もっと面白いだろうなって思ったんだ」

「そんなこと言ったってさ……」

鈴木は、ニヤニヤ笑いを浮かべている。

その様子を見て、守は、なんとなくもやもやした気持ちになった。

（ほんとに当事者になりたいって思ってるのかよ）

そう、考えていると。

「草場君ッ！」

いきなり、声をかけられた。

夢子が、目の前に立っている。

「水田さ……!？」

夢子は、いきなり、自分のふくよかな胸を守の顔に覆いかぶせた。

「ちょ……!？」

鈴木も、あっけにとられて、その様子を凝視する。

「……!？」

突然のことに暴れて離れようとするが、守はがっちり押さえこまれていて逃げられない。

息ができない。

やわらかいもので、顔面が圧迫されている。

「あーっ！」

日灯が、その様子を発見して叫び声をあげた。

「これは、『水の星座 活動宮 ラブ・ブレスト・アタック』……。蟹座の管轄の身体部位は胸だったな……あの、巨乳娘……！」

風見が、夢子の魔法名をつぶやきながら、歯ぎしりする。

「……」

土井も、わずかに眉間にしわをよせて、様子を見守っていた。

夢子は、守の顔面を自分の胸で揉むようにして包み込んでいた。

「すげえ、リアルぱふぱふ初めて見た……」

鈴木が、目を丸くしている。

「ぷはっ！」

しばらくのち、ようやく、守は、夢子の胸から解放された。

すると、夢子が、守の股間に手を伸ばしてくる。

「待……!？」

夢子は守の股間をまさぐると、すぐに放して、いかにも不思議そうな顔をして叫んだ。

「え、なんで!？」

「な、なんでって……」

こっちが言いたい。

そう思っている守だが、夢子はすごい剣幕で、守に迫ってくる。

「なんで、どうして!？」

「いや、その、水田さん？」

「こういう場合は、こう、その、カッチンカッチンになっておっきくなるはずでしょ!？」

「な、何言って」

「なんで、守君のそこは、その……」

「み、水田さ……」

「なんで興奮しないの!？」

「え、あのその」

守が視線をそらす。

「聞いた？ 今の」

「むう、興味深いな」

「……」

「あいつ、おっばい興味ないんだと思う？」

「まさか、そんなはずは」

「……不感症？」

3 エレメンツがぼそぼそと話し合う。

「ねえ、本当に、おっばいに興味ないの、守君!？」

「ちょ、おっばいって……」

「まさか、まさかとは思うけど……」

夢子が、鈴木と守を交互に見ながら言う。

「鈴木君のことが好きだから、私達のことは興味ないの!？」

「ち、違……!？」

「だって、おっばいに興味ないってことは必然的にそうでしょ？」

「何が必然的なの、水田さん!？」

「だって、私のおっばいに、おっばいに……」

夢子が、天を仰いで叫んだ。

「どうして私のおっぱいに、興奮してくれないのよーッ!!」

「いや、なんつーか、それって……」

はたから見ていた鈴木が、おずおずと発言する。

「エロくないんじゃないの？ 情緒の欠片もないっつーか」

夢子は、全身を雷で撃たれたように硬直した。

「わ、私が……」

ショックを受けた夢子が、ぱくぱくと口を開け閉めする。

「わ、私がエロくない!？」

「たしかに、活動宮の魔法はエロスにはかけるな」

「なんであたしのこと見てるのよ、風見」

「いや、別に。しかし、あれでは、単に苦しかっただけで、気持ちよさとは程遠いのではないかね」

「そりゃそうよね。一方的に顔面におっぱい押し付けただけだし」

「……空回り」

風見と日灯と土井が、さらに追い打ちをかけるように言う。

「うわああああああああああん!!」

夢子は、泣きだして、走り去っていった。

「あ、待って！」

守が、慌ててそれを追いかける。

「俺、まずいこといったかなあ……」

そうつぶやいた鈴木に。

「いや、言ってないと思うが」

「そうよね」

「……ただの事実」

風見と日灯と土井がそう言った。

「でも、あの子、スタイルのよさが自慢だったでしょ？」

「そうだな。まあ、ある意味、アイデンティティーの否定と言っても過言ではないね」

日灯と風見が、口々に言う。

「え、やっぱ、俺、傷つけた？」

「いや？ いいんじゃない、あのくらい」

「いつかは気づかねばならないんだよ。スタイルのよさとエロティシズムとは無関係なのさ」

「……夢子、大人になると思う」

心配する鈴木に、日灯と風見が軽い口調で言い、土井が、いつも通りの無表情で続けた。

しばらく、校内を探しまわり、守は、校舎裏に辿り着いた。

しゃくりあげる声が聞こえる。

夢子が、地面に座り込んで泣いていたのだった。

「あの……」

守は、泣いている女の子を前に、どうしていいかわからない気分だった。

「えっと……」

何か話しかけねばとも思うのだが、何を言ったらいいかわからない。

（なんだか俺の方が、被害者な気がするんだけど……）

いきなり、貞操を奪われ、こっちが泣きたいとも思いつつ、守は、夢子の傍に立ち続けた。

座って、視線を合わせるのは、何か違う気がしたのだ。

ただ、夢子が、もう少し落ち着くまで、待つしかない。

そう、守には思えたのだった。

「ま、まもるひゅんは」

ぐずぐずと泣きながら、夢子が言った。

「やっぱり、そうおもうの……？」

「え、思うって？」

「わたしが、えろく、ない、って」

泣きじゃくる夢子が、そう、途切れ途切れに言う。

「……その」

守は、困ったように言った。

「俺は……びっくりしたっていうか、どういう現象が発生してるのかがよくわからなかったんだけど……。水田さんが俺の顔に、む、胸を」

そこまで言って、先ほどのことが急に現実味を帯びてきて、守の心臓が口から飛び出そうになる。

「……」

夢子が、じっと、守を見上げてくる。

守は、視線をそらしながら言った。

「お、女の子が、あんまりそういうことするのはさ、どうかと思うって言うか……」

守は、呼吸を整えながら、続ける。

「もっと、自分を大切にしなよ。あ、もちろん、相手のこともだけど……」

そこまで言って、守は、自分の気持ちに気づいた。

「こういうのは……お互い、傷つくよ」

「……」

守は、夢子を責めたわけではなかった。

むしろ、その逆で。

夢子が、これ以上、傷つくのはいやだったのだ。

その気持ちが、相手に伝わればいい。

そう、守は思っていた。

「……」

夢子は、返事をしなかった。

しばらくの間、沈黙が続いた。

ぐずぐず、と、まだ涙をふき取る音がして、守は、なんとも言えない気持ちになった。

しかし。

夢子は、唐突に立ち上がったのだった。

「ああ、すっきりした！」

夢子が、泣きはらした目を、もう一度、ハンカチでぬぐう。

そして、守に向き直っていった。

「ずっと、ついててくれてありがとう、守君」

その笑顔は、すべてを吹っ切ったような、すっきりとしたもので。

さきほどの夢子とは、別人のようだった。

「あ……」

(さっきより、全然……)

夢子が、とても、かわいらしく思えた。

心臓が、先ほどとは別の感じで、どくり、と音を立てた。

鼓動が、だんだんと、早くなる。

「守君」

夢子が、守を正面から見据えて、宣言した。

「絶対、振り向かせてあげるんだからっ！」

人差し指で、守を指し示して。

夢子は、満面の笑みを浮かべた。

そして、夢子は、先ほど以上の勢いで、走り去って行ってしまった。

「キャー、言っちゃった！」

そう、叫ぶのがわずかに聞こえてきた。

その様子を、守は、ぼかーんとして見送る。

鈴木から説明を受けていた、3クォリティのことが思い出された。

蟹座は、水の星座、活動宮だと、さっき、風見が言っていた。

「もしかして、これが活動宮の激しさ、なのか？」

守は、夢子が走り去った方を見つめながらつぶやいた。

こうして、4エレメンツの火、土、風、水それぞれの魔法が、1回ずつ守に使われた。

これから先、いったいどうなっていくのか。

守には、まったく見当もつかないのであった。

第5話 獅子座の巻

教室に戻っていった守は、日灯にいらだたしげな視線を向けられた。

「サボリ？ いい度胸じゃない」

「え、だって……」

守は、夢子を追いかけて行ったために、結果的にサボってしまったことになる。

「別に、いいんだけど」

日灯が視線を外したので、守は、ほっとして、席に戻った。

肉食獣にいらまれたウサギのような気分だった。

「次は、あたしの手番なんだから……」

守を見送った日灯が、拳を握りしめた。

（夢子と草場、何を話してたの？ こんなに長時間戻ってこないなんて……夢子は先に戻ってきたけど、なんだかケロツとしてるし）

日灯が、夢子にも視線を送る。

夢子は、普段のように、ほわほわした感じを漂わせていた。

（余裕……ってわけじゃないわよね。でも、水は感情の魔法だから、夢子は感情をうまく表現するのがうまいっていえるかも。そうだとすれば、うまくコントロールすることだって）

自分があまのじゃくな態度を取ってしまうことを考え、日灯は首を振った。

「あせっててもしょうがないわ。堂々に行かないと！」

日灯が、そう決意していると。

先生が入ってきた。

「じゃあ、さくっとクラス委員を決めちゃいましょうか。先生は、正直、誰でもいいんだけど……」

担任の先生は、またしてもぶっちゃけモードであった。

「皆さん、自主的に勝手に決めちゃってくださいーい」

「先生、またテキトーなことを……」

鈴木が、苦笑する。

日灯は、ハッとして、顔を上げた。

（そう、これよ！）

日灯は、がたっと立ち上がり、宣言した。

「あたし、クラス委員になるから、草場もなって！」

「え、俺が？」

いきなり指名されて、守が驚く。

「いいから、早く立候補して！ ていうか、あたしが推薦するから、草場が男子の委員ね！」

「ちょ、待っ……」

日灯は、強引に話を進める。

「んー……」

先生は、クラスを見回した。

「他になりたい人、いる？」

教室は沈黙した。

「じゃあ、火野さんと草場君がクラス委員で決定で、いいよね？」

「え、ちょっと、これって……。でも、私になるわけにいかないし」

夢子が、急展開に慌てながら言った。

「すでに、火の魔法は始まっているということかもな」

風見が小声で言う。

「……草場君」

土井が、無理やり教壇の前に立たせられた守を見てつぶやいた。

守は、日灯とともに、ホームルームの司会進行を先生に丸投げされて、わたわたしていた。

「火野さん、なんで、俺まで……」

ホームルーム終了後、冷や汗をかいてぐったりしている守が、日灯に言った。

守は、人前で話したりするのは慣れていないのだ。

「なんでって、あんた、このクラスの中心人物じゃないの」

「ええっ、俺が!? 中心人物は火野さん達でしょ？」

「バカじゃないの。あたし達は、ぶっちゃけ、あんたを取り合ってるんじゃないの。状況、ちゃんと認識してる？」

日灯に改めて言われ、守は目を白黒させた。

「と、取り合い、って」

「思ってたより、相当バカね」

日灯が、自分の眉間に拳を押し当てて、頭痛をこらえるしぐさをした。

「いい？ これから、あたし達はゾディアック・ラブ・ウォーズであんたの取り合いをする。で、それにクラスの皆も巻き込んだじゃうわけ」

「巻き込むって……よくないよ、そんなの」

日灯の発言に守はハッとして言った。

「巻き込まずにすむならそうするわよ！ でもね、魔法の発動って言うのは、周囲には止められない現象なわけ。今のところ、地味なのしか使われてないけどね。あんたが風見のエルボーや、夢子のぱふぱふから逃げられなかったのって、偶然だと思う？」

「そ、それは」

たしかに。

突拍子もない行動だったので、予測できないというのはあった。

しかし、あまりにも、自分は無防備すぎたのではないか。

そういえば、入学式の朝のことだって……。

「火野さんが俺にぶつかったのも、避けられなかったよね」

「その話はもういい！」

日灯がいきなり怒鳴ったので、守は沈黙した。

日灯の顔がうっすら紅潮している。怒りのせいだけだろうか。

「ゾディアック・ラブ・ウォーズは、それだけでっかい魔法なの。だから、全校生徒に、あらかじめ伝えてるわけでしょ。ご迷惑おかけします、って」

「……」

守は、日灯の顔を改めて見つめた。

(迷惑なんて……)

そんな殊勝な言葉が、日灯から発せられるとは思わなかった。

「じゃ、じゃあさ」

守は、日灯に問いかけた。

「それって、やめるわけにいかないのかな、なんて……」

「は!? バカじゃないの!? あたし達、魔術師が、この機会をどれほど待ち望んでたかわかってんの!？」

「……ですよねー」

日灯にまた怒られて、守はまた、沈黙した。

そうしていると、全校集会の時間となった。

全校集会では、生徒会のほか、クラス委員が、挨拶をすることになっている。

「今日、選ばれていきなり挨拶なんて」

「たぶん、別のクラスでは昨日選ばれてたんじゃないの、クラス委員」

「ええっ、じゃあ、先生は……」

「あの担任、適当そうだし。どうせ忘れてたんでしょ。まあ、あたし達が立候補できてラッキーだったけど」

「俺は立候補じゃないんだけど」

「ガタガタ言ってないで、さっさと行くわよ」

日灯に引きずられるようにして、守は体育館へと向かった。

日灯は、体育館に入ると、守の腕をつかんだまま、どンドン前の方に向かう。

「え、火野さん？」

日灯は、守を連れたまま、壇上に登って行った。

「おお、あれがああ……」

守も日灯も有名人のため、全校生徒達の注目を集める。

「あの、挨拶とか最初にするのは生徒会の人なんじゃ」
ただでさえ入学早々、こんなに目立ってしまっているのに、さらに注目を集めるというのは。
そう、守は思ったのだが。
「いいから、こういうのは最初が肝心なの！」

そして、マイクを持った日灯は、守の肩を掴むと、全校生徒に向かって宣言した。

「あたしは、この男……草場守を落とす！」
キイイイイイイン、というハウリングとともに、日灯が叫ぶ。

「これは……獅子座の魔法……『火の星座 固着宮の魔法 ハウリング・ライオネス』か」
一般生徒の席で、風見が言った。

「ひ、日灯ちゃん……」
「……」
夢子と土井も、壇上の2人に注目する。

「えっ、えっ、あの」
混乱する守の隣で、日灯は、今度は、他の3エレメンツに視線を送り、叫ぶ。
「そして、この戦いに勝利するのは、あたしよ！」

まさに、獅子の咆哮のようであった。
体育館は、静まり返っていた。
王者として君臨する日灯に、ひざまづく臣下のように。
誰一人として、異を唱える者はいなかった。

それは、他のエレメンツも同様であった。
「やるじゃないか、日灯。私は、さっきから、異議あり、と叫びたいんだが」
風見が、震える声を絞り出し言った。
「私も、こんなのやだよ……既成事実、作られちゃうよ」
夢子が、泣きそうな顔で言った。

「私が異議あり、と叫ぶことも、夢子が泣きだすこともできないようだね。これが、獅子座の魔法の効果か」

「うん……これが、日灯ちゃんの魔法なんだね」
「……」

風見と夢子に、土井がうなずいた。
土井も、何かしたくても、邪魔することができない様子だった。

一方、壇上では。

「ほら、守も何かあるんじゃないの？」

日灯が、守に発言を促す。

全校生徒が、守に注目を集めた。

「お、俺は……」

守は、嫌な汗が背中を伝っていくのを感じていた。

すでに、手のひらはぐっしょり濡れている。

緊張で、クラクラして、今にも昏倒してしまいそうだった。

「お、俺……」

時間が永遠に感じられた。

早く、早く、この瞬間が過ぎ去ってほしい。

ただ、その一心で、守は、なんとか言葉を紡ぎ出した。

「お、俺は、クラス委員を、その……ちゃんとやろうと思います。い、1年間よろしくお願ひします！」

そう言って、ぺこりと頭を下げる。

そのまま、守は顔を上げられなかった。

羞恥心が全身を覆い尽くしたような気持ちだ。

穴があったら入りたいというのは、こういう気持ちなのだろうか。

「ふ、普通だ……!!」

守の挨拶に、体育館はざわつき始めた。

先ほどの日灯の発言に対して、あまりにも普通のクラス委員としての発言に、全校生徒が拍子抜けしたようであった。

「あ、あんたねええええ」

日灯が、わなわなと震える。

「そ、それとっ！」

守は、さっき、日灯が言っていたことを思いだして叫んだ。

「あと、皆にもなるべく迷惑かけないようにするつもりです！ 被害とかもなるべく出ないようにするんで！ ひどい目に会うのは俺だけになるようにしますから！ だ、だから、その、俺もがんばるんで、皆さん、よろしくお願いします」

守のよくわからない挨拶に、再び、どよめきが訪れた時。

拍手が、体育館に響き始めた。

鈴木が、大きな拍手を送っていたのだ。

風見と夢子、土井が、顔を見合わせ、そして、鈴木に続いて拍手を始める。

それに続くように、朝、守に挨拶してくれたクラスメイト達が。
そして、それに、他のクラスの皆が続いて。
やがて、全校生徒が、守に拍手を送っていた。

「逃げない戦いを、草場君も宣言したんだな。あの日灯にも負けていないね。なかなかやるじゃないか」

風見が、感心したように言った。

「なんだかカッコいいよ、草場君……！」

夢子は、恋する少女の瞳で、守を見つめている。

「……」

土井も、守を熱のこもった視線で見つめていた。

壇上で、日灯もうなずいた。

「草場。あんたの覚悟はよくわかったわ」

そして、守に向き直り、また叫ぶ。

「ぜったい、あたしに惚れさせるから、覚悟してよね！」

「あ、う……」

体育館中がどよめいて、またも盛大な拍手が巻き起こった。

今度は、野次や笑い声も聞こえる。

全校生徒が、日灯や守の言動を好ましく受け止めてくれているようだ。

まるで、これを大掛かりな舞台として観ているかのよう。

日灯に対し、守は、どう答えていいかわからなかった。

幸いなことに、日灯は、さらに答えを促すことはしなかった。

ただ、日灯は、挑戦的な瞳で、守を見据えていた。

(火野さんは……)

守は、ふと、日灯の真意について思いをはせた。

(火野さんは、ここまでパフォーマンスしてるけど、でも。実際には、俺のこと、どう思ってるのかな。本当に、俺のことが、好き、なのかな……)

目の前にいる、彼女の本当の気持ちが、守にはわからなかった。

もしかしたら、戦いに勝つことが目的で。

もし、そうだとしたら。

(火野さん、わからないよ)

守は、日灯の、燃えるような瞳が、本当に見ているものがなんなのか。

それを知りたいと思ったのだった。

第6話 乙女座の巻

昼休みとなった。

守が、学食で買ってきたパンを食べようとするのを見て、土井が声をかける。

「草場君……お弁当ないの？」

「ああ、今日は、母さんが早出でさ……俺も起きたのが遅かったし」

「……お母さん、働いてる？」

「うん。うちは共働きなんだ。母さんも普通に会社員。俺も、おにぎりくらいなら作れるんだけど、毎日は面倒だし」

「……夕ご飯は？」

「けっこう適当かな。俺も一応、子どものころからやってはいるんだけど、なかなか難しいよな。つい、掃除とか洗濯とか不精しちゃってさ」

「偉いよな、草場。俺、なんもやってねえよ」

鈴木が、感心したように言った。

「……」

一方、土井は、思いつめたような表情をして、うつむいた。

「土井さん？」

守が声をかけるも、土井は、何かをぶつぶつとつぶやいている。

「……高校生の男の子が……成長期……栄養失調……家が、不潔になって……」

「ど、土井さん？」

「……草場君」

土井が、顔を上げて言った。

「ごめんね。私、昨日のは魔法だから……。今日、お弁当、ないの」

「あ、いやいや」

守は慌てて手を振った。

「昨日はすごい助かったよ。ありがとう。あ、もしかして」

守は、はたと気づいていった。

「あれ、土井さんのお弁当じゃないよね。昨日、俺だけ食べてた気がするんだけど」

「……奇跡的に2つ用意してたの。それが、私の魔法」

「そうなんだ。なら、いいんだけど」

魔法の不思議さに感心しつつも、土井が昨日、昼食抜きになったわけではないことに、守は安心した。

「……私、ふだん、授業中に食べてるから」

「そ、そうなんだ」

土井の続けての発言に、守は苦笑する。

(土井さん、こんなに小さいのに、なんか意外だな)

「だから、今日はあげられないの」

「いや、いいって。気持ちだけで十分だよ」

そう言った守に、土井がずいっと迫る。

「でも、草場君の生活が心配なので……今日、私、お家行く」

「ええーっ!？」

守が大声を上げ、他の3エレメンツも、土井の宣言に気づく。

「な、家にまでいきなり上がり込むとか!？」

「土井……こいつ、大人しいからあまりマークしてなかったが……」

「気づいたら乙女座のターンだよお！」

日灯と風見、夢子が口々に驚きをあらわにする。

「なにそれ、押しかけ女房シチュエーションとか、なんなの？ 昭和？ 昭和なわけ？」

「落ち着け、日灯。こうしたベタなシチュエーションが以外にも有効だったりするのかもしれない。だからこそ、古くから恋愛ものの題材として取り上げられてきているのではないか」

「冷静に分析してる場合じゃないよ、風見ちゃん！ 土井ちゃんが守君のお家に行っちゃうんだよ！」

「どうすんの。妨害できる？」

「いや、無理だろうね。もう魔法は発動している」

「わーん、お、お家って……」

夢子が涙目になって叫ぶ。

「あんなことやこんなことまでしちゃうかもしれないじゃないのー！」

「ちょ、エロ妄想やめてよ！」

日灯が、真っ赤になって叫ぶ。

「草場君も高校生男子だしな……」

風見が、神妙な顔つきで言う。

「よし」

日灯が、ぱし、と拳と手のひらを合わせて言う。

「後をつけよう」

「賛成だ」

「異議なし！」

風見と夢子も、深くうなずいた。

「なんか、面白そうなことになってんな」

鈴木は、あたふたする守と、少し離れた場所の3エレメンツを交互に見ながら言った。

下校時刻。

土井は、守と一緒に、家に向かって歩き始めた。

日灯と風見と夢子が、こっそり後をつける。

「俺もついてっていい？」

「「「わあ！」」」

鈴木に声をかけられ、3人は同時に振り向く。

「何よ、あんた、関係ないじゃない！」

「おまえらもそうだろ？」

「う……」

日灯が鈴木に詰め寄るが、すぐに絶句させられる。

「まあ、一般的に我々がしている行為は、称賛される行いではないだろうね」

「難しい言い方だけど、悪いことってことでしょ？ 知ってるよ」

風見が腕を組み、夢子がうなだれる。

「だけど、気になるんだから！」

「私達には知る権利がある」

「守君のこと心配なんだもん！」

3人が、口々に言った。

「そっか」

鈴木が、にんまりと笑った。

「俺も、同意見、かな」

「ねえ、土井さん、まっすぐ帰らなくて大丈夫？」

土井が、守の家に来ることは確定だが、帰るのが遅くなっては家族が心配するかもしれない。

そう考えて、守は念のために確認する。

「さっきメールした」

「そ、そうなんだ」

心なしか、土井は生き生きしているように見える。

「まず、必要なものがあるから……買い出し付き合って」

「買い出し？」

守は、土井に言われるまま、スーパーへと寄った。

「……洗剤」

掃除グッズのコーナーで、土井が、いろいろな物をカゴに詰めていく。

非常に手慣れた感じだった。

「全部一式、買っとくから」

「ああ、うん……」

守は、内心、そこまでしなくても、と思ったが。

(なんとなく、反論できる余地なさそうっていうか……)

ここは、土井の言うとおりにしないと、いろいろまずそうな気がする。

一方。3 エレメンツと鈴木は。

「ちょ、なんなのあれ！」

「認めたくはないが、新婚か、同棲始めたてのカップルのようだな」

「いやあああ！ 不潔よ、守君！」

「すげーな、なんだか」

スーパーの商品の影から、守と土井を見ていたのだった。

そして、守の家に着く。

両親はまだ帰っていない。

（これって2人っきりってこと、だよな）

わかってはいたことだが、改めてその状況になると、緊張する。

ふと、土井の方を見ると。

「.....お邪魔します」

几帳面に玄関に靴をそろえ、上がってきたのだった。

「.....乙女座の魔法」

おもむろに、土井がエプロンを身に着けて言う。

「.....『土の星座 柔軟宮の魔法 ラブ&クリーニング』」

土井の周りから、光が発せられた気がした。

土井は、掃除用具一式を手に取り、家中の掃除を始めた。

非常に手際よく、隅々までピカピカにしていく。

「.....掃除機、どのくらいの頻度で使ってる？」

「えっと、その」

「.....大丈夫、今日はきれいにするから」

土井は、再び、掃除へと戻っていった。

守も、なるべく、手伝って、早く終わるようにする。

「.....次は、洗濯」

土井が、山のように積まれた洗濯物を洗濯機に入れていく。

「あ、それはっ！」

守の下着であった。

「いや、女の子が俺のパンツとか！」

「.....別に気にしない」

表情を変えずに、土井が答えた。

「そ、そうなんだ」

守は土井に押し切られて、そのまま下着も洗濯してもらってしまう。

その様子を、3エレメンツと鈴木が、窓からのぞきこんでいた。

「一見地味だと思ったが、家に上がって、生活に浸透する、という意味では、凄まじいな。この魔法は」

「そうね……。土の魔法、改めて恐ろしさを感じるっていうか」

風見の発言に、日灯がうなづく・

「ふふん、でも、生活臭ばっかで、エロくはないもん！」

夢子が、無理をして言う。

「夢子、君が言うか」

風見が嘆息する。

「でも、なんだか、リードされた感じ……。ずっと夫婦だったみたいな」

日灯が、複雑そうな表情で言った。

「日灯ちゃん、なんてこと言うの!？」

「うわ、押さないでよ、夢子！」

「ちょ、皆、騒ぐんじゃない！」

「……って、遅いかも」

鈴木が、顔を上げていった。

「そこで、何してるんだ？」

窓からのぞきこんでいる4人を発見して、守が苦笑する。

「そんなとこいないで、入れば？」

掃除と洗濯は、ちょうど終わったところだった。

土井は、お茶の場所などをごく自然にわかっているようで、全員分を淹れて持ってくる。

これも、魔法の効果のようだった。

「粗茶ですが」

テーブルに着いた3エレメンツと鈴木に、そう言ってお茶を出してくる。

(俺んちのお茶、なんだけど)

そう思って苦笑しつつも、守は口には出さなかった。

「なんだか、こういうのってさ」

お茶を受け取り、鈴木が言った。

「奥さんみたいだよな」

「えっ、えっ」

守が動揺する。

「……」

土井は沈黙していた。なんとなく、まんざらでもなさそうな表情だった。

3エレメンツは顔を見合わせた。

そうではない、と、皆言いたかったのだが、うまく否定する要素が見つけれない。

「おのれ、だが、それにはまだ早い段階だということを忘れるなよ」

「……風見ちゃん？」

風見が、小声で、意味深に言ったのを、夢子が聞き返す。

しかし、風見は、何食わぬ顔で、お茶をすすった。

「お茶菓子みたいなのがあるといいな。ポテチとかでいいか？」

守が、台所をさがして言う。

「……簡単なおやつなら作れる」

土井が、台所に立って言う。

「ドーナツとか。作ってもいい？」

「え、そんなのまで作れるんだ」

守の許可を得ると、土井は、手際よく、調理を始める。

まるで、いつでも、この台所に立っているかのように。

「これは、魔法なの……？ でも、クリーニングじゃないし」

「草場君、単純に、餌付けされてしまったかもしれないな」

「ええーっ!？」

日灯と風見の言葉に、夢子が慌てて言う。

「それって、土井ちゃんが、草場君に料理してあげるの、当たり前になってるってこと？ それなら、私だって……」

台所に向かおうとする夢子を、土井が制する。

「座ってて」

「え……でも……」

「いいの、お客さんだから」

土井の発言に、夢子はショックを受ける。

「土井ちゃんだって、土井ちゃんだって、お客さんじゃないのー！」

「ま、まあまあ」

守が、仲裁に入る。

「その、土井さんもお客さんだけど、水田さん達もお客さんなのは確かだし。気にしなくていいよ」

「うう……」

夢子は、すごすごと引き下がった。

しばらくして、土井の作ったドーナツが完成した。

「うわあ……」

守が出来栄えに感心する。

「うまそうだな！」

鈴木が、満面の笑みで言う。

「たしかに、これはすごいわね」

「こと家事で土井に勝つことはできないな」

「わーん、外はカリッとして、中はふっくらしてるよう！」

3エレメンツも、ドーナツを食べてそう感想を言い合う。

「すごいわね、土井さん。ありがとう」

「……」

土井が、ほんのわずかだけ微笑んだ。

(やっぱ、きれいだよな)

守は、土井の微笑を見て、そう思った。

こうして、楽しい時間が過ぎていき、守は、土井に深く感謝するのだった。

第7話 天秤座の巻

翌日の学校にて。

4 エレメンツは、教室で顔を合わせた。

「いろいろあったけど、前半戦が終了したね」

日灯が、感慨深げに言った。

「ああ。十二星座の魔法のうち、6つまでが使われたわけだからな」

風見が、こくりとうなずく。

「まだ、勝負は決まったわけじゃない、わよね……」

夢子が、自分に言い聞かせるように言った。

「……」

土井も、これまでのことを噛みしめるように、うなずいた。

「ああ、勝負はまだ決まったわけじゃない」

風見が、一同を見回し、不敵な笑みを浮かべた。

「だが、次は私のターンだ」

「ちょ、あんた、今度は何を企んでるの!？」

「……」

日灯は、風見に詰め寄ろうとする。

土井も、何か驚異的なものを見るような視線を風見に送る。

「風見ちゃん、まさか、まさかとは思うけど、天秤座の!？」

夢子が、恐ろしいことに気づいたように言った。

「何言ってるの、夢子」

「日灯ちゃんもわかるでしょ、恋する女の子なら！ 風見ちゃんがやろうとしてるのは……」

恐れおののく夢子に、風見は笑みを向ける。

「そのまさかさ」

放送室にて。

守が、ドアをノックして、入ってきた。

「待っていたよ」

風見が、放送室の椅子を回して、守に振り返る。

「あれ、五十嵐さん？」

守が、怪訝な表情を浮かべる。

「たしか、クラス委員は放送室に来るようになって言われたと思うんだけど……。火野さんは？」

」

「ああ、その話は嘘だ」

風見はしれっと言った。

「ええっ」

「安心したまえ。私は人を傷つける嘘はつかない主義だ」

「え、じゃあ……」

守は、先日のことを思いだした。

「この間のラブレターのことも……」

「う……その話はもういい」

風見は、一瞬、顔を赤らめたが、すぐに切り替えた。

「では、始めようか」

風見が、放送機具のスイッチを入れる。

マイクがオンになり、全校に向かって、放送が開始された。

風見は、マイクに向かって、大きな声で言った。

「私、五十嵐風見は、草場守と結婚する！」

「ええー!？」

あまりのことに、守が大声を上げる。

「放送されているぞ、草場君」

「あ、えと、その」

守があたふたする。

「どうした、嫌なのか、草場君。それとも、私に恥をかかせる気かね？」

「そ、それは……」

「さあ、私のプロポーズに答えてもらおうか、草場君」

全校に向かって、風見と守のやりとりが放送されていた。

「なんだあれ！」

「きゃー、プロポーズだって！」

「すげー！」

校内がざわつく。

全校生徒が、風見と守のやりとりに注目していた。

「ちょ、これが天秤座……結婚を司る星座の魔法……！ 『風の星座 活動宮の魔法 マリッジ・センセーション』だっていうの!？」

日灯が、廊下で校内放送を聞きながら言う。

「風見ちゃんが草場君の家で言ってたのはこれだったのね……」

夢子が、土井の魔法に対して、風見が意味深に言っていた言葉を思い出していった。

「……」

土井も、無表情ながら、顔つきを険しくさせる。

「とにかく、早く、この放送を止めさせないと！」

「うん、このままじゃ、本当にカップルになっちゃうよお！」

「……！」

日灯と夢子と土井は、放送室に向かって駆け出した。

しかし。

放送室には鍵がかかっており、いくら外から開けようとしても開かなかった。

「ちょ、風見！ 開けなさいよ！」

「守君！ 開けてー！」

「……」

3エレメンツは、放送室の扉をドンドンと叩く。

しかし、中にいる2人からは反応がない。

「さあ、どうする？ 誓いのキスでもするかね、草場君？」

「ちょ、五十嵐さん……」

「うわあああ、何言ってんだ、あいつら！」

「守君！ だめーっ！」

「……！」

中の声だけが放送で聞こえてきて、3エレメンツはやきもきする。

放送室の中では。

「さあ、どうするね、草場君。早く答えを出したまえ」

「五十嵐さん……」

風見は、悠然と腕を組んで、守へと近づいてくる。

マイクのスイッチは入ったまま、中での会話はすべて拾われてしまっている。

守は、後ずさりしたくなる気持ちを押さえて、なんとか言った。

「あ、あの、今はまだ早いっていうか……俺達、結婚できる年でもないし」

「かまうものか。これは、公然と2人が愛し合っていることを宣言するのが目的なのだから」

「あ、愛し合って……」

「いやなのか？」

風見が、また一步、守に近づく。

守は、たまらず一步後退する。

じりじりと、風見は近づき、守は壁際まで追い詰められてしまう。

「い、五十嵐さん……」

しかし、守は、風見から目を逸らした瞬間、風見の手が震えているのに気付いた。

それは、わずかなものであったが。
たしかに、彼女は、恐れているのだと。
勇気を振り絞って、この告白をしたのだと。
そう、守は、気付いてしまったのだった。

「五十嵐さん」

守は、息を整えて、風見を見据えた。
風見は、まだ、人を食ったような表情を浮かべていた。

「俺は……」

守は、すこしずつ、ゆっくりと話し始めた。

「俺は、まだ、自分の気持ちとかよくわからないんだ……」

風見は、黙って、守の言葉を待っている。

「だから、その……今すぐ、結婚とか、そういうのはわからないんだ、ごめん」

風見の表情が、歪んだように見えた。

薄い笑い。

まるで、自嘲するかのような。

守は、それを止めるように続けた。

「でも、でも、自分の気持ちが整理できたら、ちゃんと返事するから！」

守は、一歩、前へと進み出た。

「あのラブレターのこと、うれしかったし」

「ラブレター!？」

守の発言に、校内がざわめく。

「五十嵐、草場にラブレター渡してたのか？」

「え、うそ、初耳なんだけど」

「それでさらにプロポーズってマジかよ！」

「ちょ、あんたたち！ 何話してんの！」

「いやーっ！ 開けてー！」

「……」

3 エレメンツは、放送室のドアをさらに叩き続ける。

風見はといえば。

「な、な、な……」

はっきりと真っ赤になって、喚き散らした。

「は、恥ずかしいことを言うな！」

「えー!? いまさら!？」

これだけのことをしておきながらの、風見の反応を見て、守は思わず言ってしまった。

「だ、だって、あれは君だけに渡したもので、こうした公の場でのやりとりとは意味が異なる
というか……。き、君はデリカシーのない男だっ！」

「わ、わあ、ごめんなさいっ！」

風見が、感情を爆発させる。

責められて、守は、慌てて謝った。

「い、いや、もういいんだ。もういい……」

やがて、風見は、小さな声でそう言うと、片手で口元を覆い隠して黙ってしまった。

「五十嵐さん……」

守は、風見が傷ついたのでないかと、不安に思いながら見守った。

しかし。

風見は、しばらくすると、大きく息をついた。

「じゃあ、私はふられてない、てことでいいんだな、草場君」

「……うん、俺は五十嵐さんをふってないよ」

風見の真剣な視線に、守も、同じように真剣に答えた。

「……ならいいんだ」

風見は、フッと笑ってうなずいた。

守は、風見の様子を見て、安心した。

勇気を振り絞ったであろう、彼女が、傷つかないでくれることを。

そして、本当に、自分の気持ちができるまで、待ってほしいと伝えられたことを。

そのことを、守は、心から安堵したのだ。

なのに。

風見は、いつもどおりの、いたずらっぽい笑みを浮かべた。

そして、マイクに向かって叫ぶ。

「以上で、結婚宣言とする！」

「ちょ、だからそれは！」

しかし、風の魔法の効果は、すでに発動している。

この結婚宣言は、校内中にあますところなく、知れ渡ってしまった。

マイクのスイッチを切った風見が、守に言った。

「言っただろ。私に恥をかかせてくれるなよ、草場君」

「そ、そんなこと言われても」

「宣言は宣言だ。これはこれ。君の気持ちは君の気持ちだ」

風見は、いつもどおりの、余裕たっぷりの笑みで言った。

「私は、信じているよ、草場君。君が、私に応えてくれるのをね」

そして、風見は、放送室のドアを指さして言った。

「さて、草場君、悪いが、先に出てくれないかな」

守は、風見の言うとおりにした。

そして、待ち構えていた日灯と夢子と土井に、もみくちゃにされたのだった。

やがて、学校中に、噂が広まっていった。

噂の広がる速度は、まさに風のようにであった。

校内で形成された世論によれば。

「五十嵐風見と草場守は公認カップルである」

「それに、火野日灯が対抗している」

ということになっていた。

守は、校内を歩くたびに、以前にもまして注目の的となった。

もちろん、風見や日灯も同様である。

風見は、いつもどおり、ひょうひょうとしていたが。

日灯は、自分に視線が集まるたびに、にらみを利かせ、ギャラリーを追い払っていた。

「よお、色男」

鈴木が、守を冷やかしてくる。

「大変だったんだからな」

「はは、わかってるよ。でも、やっぱ、あんなふうに言われてみたいよな」

「ほんとに、そう思うのか？」

「うん、まあ、他人事だから思う気がしてきた」

「鈴木……」

守は、脱力した。

その様子を見守る土井が、ぼそりと言った。

「……実際は違うから」

「そそそそそそうよね、実際は違うのよね！」

夢子も、同意する。

しかし、あくまでクールな態度に戻った土井に対して、夢子は動揺しまくりである。

「だめ、だめよ、夢子。このままじゃだめよ。何か、次の作戦を考えないと。だって、次は、私の手番なんだから……」

そう、夢子がつぶやき、守に視線を送る。

守は、なぜか、背中にぞくりとしたものを感じて、身を震わせたのだった。

第8話 蠍座の巻

風見のプロポーズの熱気冷めやらぬ校内。
こっそり人目を避けて、守が帰ろうとすると。
廊下に座り込んでいる女の子がいた。
夢子だった。

「……」

「み、水田さん？」

スカートのまま、廊下に直に座り込んでいる夢子に、守がおずおずと声をかける。

「ねえ、水田さん。いったいどうしたの？」

「夢子って呼んで」

低い声で夢子が言った。

「ゆ、夢子……ちゃん」

なんとなく、逆らってはいけない気がして、守は彼女の名を呼んだ。

夢子は、顔をひざにくっつけており、表情を伺うことはできない。

くぐもった声で、夢子は続けた。

「守君」

「は、はい」

守は、思わず姿勢を正してしまう。

何か、尋常でない気迫を感じる。

「ねえ、なんで、風見ちゃんの結婚宣言、受けちゃったの？」

「い、いや、あれは受けたっていうか、その」

守は、頬をかきながら、困っていた。

「あれは、つまり、なんていうか……」

守が、煮え切らない態度を続けているのに、夢子が決意の姿勢で、畳み掛けた。

「それとも、日灯ちゃんのことを好きなの!？」

「う、それは……」

全校生徒の前で、日灯が咆哮したのを思い出す。

「お、俺……」

夢子が、顔を上げ、ゆらりと立ち上がった。

「はっきりしてよ……」

「お、俺は」

「守君がはっきりしないから、皆、苦しいんだよ」

夢子の言葉に、守は動揺した。

「俺のせいで……」

「そう、守君のせいでもあるんだよ」

夢子は、さらに、守に一步近づき、そして、うつむいて黙った。

「……」

「水……夢子ちゃん？」

「守君……」

夢子は、顔を上げ、泣き叫んだ。

「私の身体を知ってるくせに一！」

「ちょ、何を言い出すんだよ!？」

「守君のばかあああああああああああ！」

「や、やめてよ、ちょっと！」

守が、周囲を気にしつつ夢子に駆け寄る。

すると。

「ふふ、ふふふふふ」

夢子は、今度は笑いはじめた。

「私のこと愛してくれないなら、皆、死んじゃえばいいのよ！」

何か、どす黒いものが、夢子の身体からあふれ出たように見えた。

夢子は、いつのまにか、フラスコのようなものを手にしていた。

「……これが、蠍座の魔法よ」

夢子が、にたり、と笑った。

「どんなに言っても、聞いてくれないのなら」

夢子が、守に狂気をはらんだ目をむけて、言った。

「こうなったら、媚薬でイかせてあ・げ・る」

「うわあああああああああああああっ!？」

守は、全力で走って逃げだした。

このままでは、あの薬品をかがされてしまうだろう。

そうになったら、大変なことになるに違いなかった。

「お、落ち着いて！ やめて、水田さん！」

「夢子って呼んでって言うてるでしょおおおおおお」

「うわあああああ！」

守を追い回す夢子を、他の3エレメンツが発見する。

「これは、『水の星座 固着宮の魔法 スコーピオン・デス・ポイズン』が発動しているんだ

！ このままでは、草場君が危ない！」

「夢子の奴、完全にヤンデレ化してるじゃないの！」

「……蠍座の司る、性と死」

風見と日灯と土井が、口々に状況を解説する。

「やめなさいよ、夢子！ 落ち着きなって！」

日灯が、声をかけるが。

「ふふ、ふふふふふふ」

夢子からまともな返事は帰ってこない。

「ダメだ、今の彼女に周りの言葉は通用しない！」

風見が叫んだ瞬間、夢子は、ボールのようなものを取り出した。

「邪魔しないで」

「夢子!? あんた、何考えて……」

夢子は、まず、取り押さえようとしていた日灯を殴り倒した。

鈍い音がして、日灯が廊下に倒れる。

「ひ、日灯？」

風見が、日灯の名を呼ぶ。

夢子は、すぐに、風見と土井の近くに迫っていた。

「や、やめろ、夢子!？」

「……暴力、反対」

風見と、土井も、次々にボールのようなもので殴られ、倒れた。

「み、みんな……」

守は、累々と倒れている3エレメンツを見て、がくがくと震えながら、夢子を振り返る。

「ふふ、ふふふ」

「うわあああああ」

「待ってー！ 守君！」

夢子は、右手にボールのようなもの、左手に媚薬を持ったままで、守を再び追い始めた。

「だいじょうぶ、痛くないから、ね？」

「信じられるわけないでしょおおおおお」

守が、そう叫びながら、必死で逃げ惑っていると。

突然、目の前に、鈴木が通りかかった。

「どうしたんだ？」

鈴木は、まったく普段通りだった。

「すまん、鈴木！」

「うわっ!？」

とっさの判断だった。

自分でも、ひどいと思う。

それでも。

守は、鈴木を盾に、媚薬を押し付けようとする夢子をかわしていた。

「あ……」

鈴木の目が、とろんとして、焦点が定まらなくなる。

「水田さん、俺……」

鈴木は、夢子を抱きしめようと腕を伸ばす。

「きゃあああああああああ!？」

夢子は、バールのようなものをフルスイングした。

「ごがっ!？」

バールのようなものは、鈴木の側頭部に直撃し、鈴木はぶっ飛ばされて、壁にぶつかった。

そして、鈴木はそのまま動かなくなった。

「守君、守君、守君……」

「あ、あ、あ……」

守は、自分の名を呼ぶ夢子を涙目で見つめる。

「守君はどうして」

ざらり、と、夢子の目が光った。

「どうして、守君は、私のこと受け入れてくれないのかなあ？」

「うわあああああああああ」

守は、再び走り出した。

(ごめん、鈴木！ ごめん、火野さん、五十嵐さん、土井さん！)

心の中で、犠牲になった皆に謝りながら、守は走り続ける。

しかし、やがて、廊下は行き止まりとなった。

守は、空き教室の扉を開けて、走りこんだ。

「守君」

夢子が、廊下を歩く音。

そして、教室の扉を開く音が響く。

「どうして、逃げるの、ねえ」

「だ、だって……」

机の陰に隠れていた守に、夢子が追い付き問う。

守は、必死で、なんとか言葉を吐き出した。

「こんなのって、ダメだよ……ううっ！」

しかし、守は、ついに媚薬をかがされてしまった。

紫色の液体が、フラスコの中でしゅうしゅうと音を立てて煙を出し続けている。

「く……」

その煙を、大量に吸い込んでしまう。

守の意識は、朦朧としてきた。

それと同時に、夢子も、その煙をすってしまったようだった。

「や、私、自分の、毒……」

夢子が膝をつき、守にもたれかかる。

守も、もはや、立ち上がることはできなかった。

ぼたり、と守が倒れ、その上に、夢子が覆いかぶさる。

「ま、守君……」

「水田さん……」

意識が飛ばないように、必死で抵抗しながら、守が訴える。

「水田さん、こういうの、ダメだと思うんだ」

「……」

「よくないよ。前も言ったじゃないか」

「だ、だって」

「本当に、気持ちが通じ合ってなきゃ、こんなの」

「でも、でも……」

暖かい水滴が、守の顔にかかる。

夢子の涙だった。

「水田さん……」

守は、しびれる手を、夢子のほうに伸ばしながら続ける。

守の手が、夢子のふわふわの髪にふれる。

「俺、水田さんの気持ちは……」

意識が朦朧とする。

このまま、暗い闇の中に溶けてしまいそうだ。

「俺、水田さんの気持ちは……うれし、かった、んだ」

自分でも意外な言葉だった。

しかし、それは、本当の気持ちだった。

「俺を、ここまで、想ってくれたことが……その気持ちだけは、うれしかったから」

ぼたり、と、また、夢子の涙が、守の額に落ちた。

「ほんとに？」

夢子が、両目から涙をあふれさせながら、守を見た。

吐息が、守の頬に触れる。

「うん……」

守は、なんとかうなずいた。

「それは、ほんとだよ。だからさ、もっと、自分を大切に……」

「へへ」

守が言い終わらぬうちに、夢子は小さく笑った。

「ありがとう、守君……」

そして、夢子は、そのまま守の上へと倒れてきた。

呼吸の音が、すぐ近くで聞こえる。

夢子が、眠りに落ちたのだと、守にはわかった。

「ああ、俺……」

このまま、眠ってはいけない。

この毒が、回ってしまう。

守も、夢子も。

他の皆を、助けなければ。

そう、考える守だが。

身体は、もう、言うことを聞かなかった。

（水田さん……夢子ちゃん）

守は、強い、眠りの重力に捕らわれて行った。

身体が、深い深い、湖の底に、沈んでいくようだった。

深い、深い、真っ暗な湖の中に。

守は、もう、守という1人の意識ではないような気がした。

そこでは、他者との間の壁が、とけだしてしまうような。

夢子と、自分との意識が、混ざり合ってしまうような。

夢子の寂しさと、温もりを求める気持ちが、伝わってきた。

それが、恋なのか、愛なのか。

守にはよくわからなかった。

もう、難しいことは考えられなかった。

真っ暗な湖の底の、奥深くに、守と夢子は沈んでいった。

湖の底は、泥がたまっていて、その中に、守も夢子もうずもれて。

さらに、深く深く。

ひたすらに、沈んでいってしまうのだった。

「草場、草場！」

誰かが守を呼んでいる。

「起きろ、起きろ、草場！」

女の子の声だ。

守は、薄く目を開けた。

光がまぶしかった。

「草場！」

守と日灯の目が合う。

「ひ……の、さん？」

日灯は、安心した様子で、笑った。

「よかった、無事だったんだな」

「あ、俺……」

守は、ベッドの上に寝かせていられたのだ。

「ここは？」

「保健室」

たしかに、保健室のベッドの上だ。

かすかに、部屋の中に、独特の消毒薬のにおいがする。

「あんた、蠍の毒でかなりまいててさ……。解毒するの、大変だったんだからね」

日灯は、大げさにため息をついて見せた。

「解毒って、魔法で？」

「そ。あたしが使ったのは射手座の魔法だよ」

守は、ふと、気付いて、起き上がり、日灯に問いかけた。

「夢子ちゃ……水田さんは？」

日灯は、少しムツとしたようだった。

「夢子も大丈夫。隣のベッドで寝てるよ」

カーテンの向こう側に、誰かがいる気配がする。

「そっか……」

守は、安堵の息をもらした。

自分が助かったのはもちろんだが、夢子も無事でよかったと、心から思った。

「そういえば、射手座の魔法で、解毒って、どういうことなんだ？」

射手座といえば、上半身が人間で、下半身が馬の、ケンタウロスが、弓を射ようとしている姿の星座のはずだ。

それで、なぜ、解毒ができたのか、守は不思議に思った。

「ああ、それね。あたしの使った、射手座の魔法は、『火の星座 柔軟宮 ケンタウロス・クリニック』っていうんだ」

「け、けんたうろす・くりにつく？」

また、珍妙な魔法名が飛び出してきた。

困惑している守に、日灯は腰に手を当てて続ける。

「何その態度。ちゃんとした魔法なんだからね」

「うん、感謝はしてる、よ……」

なんであれ、その魔法のおかげで助かったのだから。

守の発言に、日灯は、満足そうにうなずいた。

「よろしい」

そう言って、日灯は説明を続ける。

「射手座の元になったって言われてるギリシャ神話の登場人物、ケンタウロスのカイロンは、高名な医師だったの。武に長けたケンタウロス一族の、弓の名手でありながら、ね」

「ケンタウロスのカイロン……」

「うん。カイロンって言う星も、別にあるよ」

「そうか。医師の力だから、解毒ができたのか」

「そう。納得した？」

「火野さん……」

「日灯でいいよ」

日灯は、ニッと笑ってみせた。

「もう、なんともないよね、草場」

「ああ、うん。もう平気だと思うよ」

手を動かしながら、守が答えた。

（ずっと、俺についてくれたんだよな）

どのくらい時間がたっているのかわからない。

だが、けっこう長い時間、眠っていた気がする。

それに、いくら魔法でも、毒を打ち消すというのは、なんだか大変そうだ。

きっと、日灯は、守のことを本当に心配して、介抱してくれたのだ。

「ありがとう、火野……日灯、ちゃん」

守は日灯の名を呼んだ。

「せいぜい感謝しなさいよ」

日灯は、胸を張って言って見せた。

「そういえば、さっき、大丈夫だった？」

「ああ、夢子に殴られたこと？」

嫌なことを思いだした表情で、日灯が言った。

「かなりひどい目にあったけど、自分の傷も癒したから」

「そ、そうなんだ」

やっぱり、殴られていたのは幻などではなく、事実だったらしい。

「じゃあ、他の皆は？」

「ああ、もちろん、風見や土井や鈴木も大丈夫だよ」

日灯は、全員を魔法で助けたようだった。

「そういえば、草場。鈴木がちょっと大変なことになってたんだけど」

「え、ええと」

鈴木を犠牲にして逃げてしまったことを思いだして、守は視線を逸らした。

「さて、あたしの魔法、これが最後なんだ」

唐突に、日灯が言った。

「え……」

「まあ、こんなふうにするなんて思ってなかったけどね」

感慨深そうに言って、日灯は続けた。

「だけど、これが最後だからこそ、あたしは覚悟してるの」

日灯が、じっと、守の目を見つめた。

「今度こそ、あんたを落とさせてもらう。宣言した通りにね」

「日灯ちゃん……」

「だって、草場、あんたはあたしの運命の王子様なんだ」

日灯の表情は、これまでになく、優しいものだった。

言葉は、今まで通りの勝気さが現れていたが、日灯は、今までと違って見えた。

守は、自分の鼓動が早くなっていくのを感じた。

「日灯ちゃん、俺……」

守が沈黙に耐えられなくなって、何かを言いかけた時。

「さて、じゃあ、この弓矢で落とさせてもらおうかな」

がしゃり、と音を立てて、日灯が、巨大な弓矢をどこからともなく取り出した。

「ちょ!？」

守が、慌ててベッドから跳ね起きる。

「ねえ、今、傷を癒すとか言う話、してなかったっけ!？」

「言ったろ。射手座は柔軟宮。柔軟に行動を変えられるんだよ」

「なんだよそれー!？」

守は、ベッドから飛び出して、走り始めた。

「待て、草場あ！」

日灯が、走って追いかけてくる。
廊下で、矢をつがえては射て、矢をつがえては射て。
壁に、矢が次々突き刺さっていく。

「さ、さっきの蠍座のときと変わらないじゃないかー!？」
守は絶叫した。

「待てよ、草場！ 別に痛くないって！ 多分！」
「矢が刺さったら死んじゃうよ、死んじゃう！」
守は、ひたすら走り回った。

校内は、放課後だったせいか、人影はまばらだったが。
それでも、たまには人とすれ違った。

「す、すみません、どいてくださーい！」
全校集会で、迷惑かけないようにする、と言ったものの。
「無理！ 絶対無理だよ！ 絶対、迷惑かけるって！」
日灯の言っていたことは正しかったのだと、守はようやく気付いた。
これでは、全校生徒を巻き込むというのもうなずける。

「うわあ！」
「きゃあ！」
たまに、すれ違う人の悲鳴が聞こえた。
守は、なるべく、振り返らないようにして、全力で走った。
(カイロンの癒しの力で、また、なんとかなる、よな……?)
そうでないと困る。
守は、必死で走り、校内を駆け巡った。

「こいつ、けっこうすばしっこいよな！」
獲物を狙う狩人の発言をしつつ、日灯が追いかけてくる。
なんだか、以前も、こういう感じだった気がする。
(獅子の次はケンタウロスの狩人かよ……！)
日灯の、火の魔法の激しさに、守はおののいていた。

しかし、ついに。
守は、廊下の突き当たりに出くわしてしまった。
「しまっ……」
「よっしゃ、見つけた！」
そして、そのまま、壁際へと追い詰められてしまう。

「わあああ、これもさっきの蠍座の時と同じパターン！」

「さあ、観念しろ」

弓をぎりぎり引き絞りながら、日灯が、守に向かって言う。

「火野さん、火野さんはっ」

守は、日灯を見つめ返して、言った。

「火野さんは結局、俺のこと、どう思ってるんだ？」

「え？」

日灯の動きが、ぴたりと止まる。

守は、さらに、言葉が続けた。

「火野さんは、俺を落とすとか言ってるけど、言ってるけどさ」

守は、ずっと、思っていたことを伝えた。

「なんでそんなこと言ってるのか、結局よくわからないままだし。どうして、あんなふうに、全校生徒の前で宣言されたのかも、よくわからないよ」

守は、それまで溜め込んできたものを、吐き出すように言った。

日灯は、自分のことをどう思っているのか。

ずっと、わからないままだった。

だから。

「そういうふうに、運命の王子様、なんて言われても、それって、形式上、言ってるだけなんじゃ……」

鈍い音が響いた。

日灯が、拳で、壁を殴りつけたのだ。

「うるせえよ」

日灯が、怒りと、そして、別の感情から、顔を紅潮させ、叫ぶ。

「まだわかんないのかよ、この鈍感！」

もう一度、日灯が、壁を殴りつけた。

再び、鈍い音が響いた。

「いくら、ゾディアック・ラブ・ウォーズの4エレメントの戦いだからって、てめーを好きじゃない奴がいるわけないだろうが！」

守は、はっとして、顔を上げる。

「お、俺は……」

「夢子だって、風見だって、土井だって、あんたのことが好きなんだよ」

日灯は、守を睨みつけるように言った。

「そうじゃなきゃ、誰も、ここまでするわけないじゃないか！」

日灯は、さらに続ける。

「ああ、あたしだってそうだよ。くやしいけど。あんたみたいなヘタレ、なんで好きなのかわ

かんない。そんなの説明できっこない」

日灯は、首を振った。

「あんたは、いつもそうやって、答えを欲しがるとね、草場」

守は、何も言うことができない。

「でも、説明できない。この感情を説明しろなんて言われても、どうしたらいいかわかんないよ」

「火野さん……」

自分が、日灯を追い詰めてしまったのだ。

気持ちを踏みにじってしまったのだ。

そう、守は思った。

日灯は、さらに言った。

「これもゾディアック・ラブ・ウォーズの魔法かもしれない」

弓矢を見ながら、日灯は言った。

「こんなのって、おかしいかもしれない。けどさ」

守は、日灯の言葉を、黙って受け止める。

「だけど、あたしはあんたが好き。それでもう充分だろ？」

その、日灯の表情を見て。

夕日に照らされた、その表情に、守は、それだけで射られたようになってしまった。

守は、そっと、日灯に向けて、手を伸ばす。

頬に、手をふれたいと。

自然に思っていたのだ。

この、少女に、ふれたいと思ったのだ。

「だから、受け取れよ」

日灯は、弓に矢をつがえた。

至近距離から、弓が引き絞られる。

「あたしの、最後の愛の魔法ッ！」

守の心臓を、日灯の放った矢が打ち抜く。

再び、守は、真っ暗な闇の中へと入っていった。

しかし、今度は、落ちていくのではない。

まるで、宇宙空間に上っていくかのように。

守は、自分の心臓が、星になったのかもしれない、と思った。

日灯の魔法によって、心臓が、星にされてしまったのだと。

そんなことを、守は、考えていた。

「……草場君」

再び、倒れた守を、助け起こす者がいた。

「土井、さん？」

土井は、無表情な顔に、決意を秘めているようだった。

「……許せない」

「土井さん？」

起き上がって、立ち上がりながら、守は、土井のまとう雰囲気気づいた。

これまで、土井は喜怒哀楽の感情がわかりにくかった。

しかし、今回は違った。

激しい、怒りの感情。

「皆、草場君のこと、傷つけて……」

土井の周りの空気が変わっていく。

どこかで、地鳴りのような音が響き渡る。

日灯が、慌てて、周囲を見渡す。

「土井、何したの？」

「それは、こっちの台詞」

土井が、日灯に、厳しい視線を送る。

「絶対に……」

校庭の地面が割れた。

轟音と共に、巨大な影が現れる。

「あ、あれは!？」

窓から見えるものに、守が驚きの声を上げる。

それは、巨大な城だった。

機動城塞、というのが正しい表現かもしれない。

それは、城でありながら、空を飛んでいた。

「許さないッ！」

土井が叫んだ瞬間、光が、城塞から発せられた。

校舎の一部が、吹き飛んだ。

「うわああああああ」

守が、あまりのことに、廊下にへたり込む。

「や、やめろ、土井iiiiii！」

日灯が叫ぶが、再び、ビームが照射された。

校舎が破壊され、校庭の地面がえぐれて吹き飛ぶ。

「やめろって言ってんだろー！」

土井は、窓から、機動城塞に飛び移った。

日灯は、なおも、必死に叫ぶ。

「一番、怒らせてはいけない人物のことを忘れていたな」

守の後ろに、風見がやってきていた。

「な、なんなのあれ、ねえ!？」

守が、風見にすがりつくようにして問いかける。

「あれは、『土の星座 活動宮の魔法 カプリコーン・キャッスル』。山羊座は、土の活動宮だからな」

「活動宮って、激しいやつだよな!? って、いくらなんでも、あれはおかしいだろ!？」

「山羊座は城に象徴される星座。このくらいのこと起こってもおかしくはないさ」

「そ、そんな……」

守は、慄然として、機動城塞を見つめた。

「ねえ、風見」

日灯が、風見に問いかけた。

「土井の怒ってる時の対処方法、知ってる？」

「さあ、どうだったかな……」

「知らないの!？」

「彼女が感情を激することはまれなことだ。それは君も知ってるだろう」

「そ、そうだけど」

「普段、大人しい人物ほど、怒ると恐ろしいんだよ」

「え、何が起きているの？」

夢子が、騒ぎに気づいて、保健室から、守達の近くにやってきた。

まだ少し、とろんとした目をしていた。

眠りから覚めて間もないようだった。

次の瞬間、ビームが校舎に直撃し、またも、外壁がはじけ飛んだ。

「きゃーっきゃーっ!？」

夢子は、近くにひざまずいていた守に抱きついた。

「助けて、守君！」

「お、落ち着いて！」

守が、夢子を引きはがそうとする。

このままでは、危険だ。

「は、早く逃げないと！」

しかし、夢子は、なおも守にしがみついてくる。

「だって！　だって！」

土井は、その様子を確認すると、機動城塞の主砲を、夢子へと合わせた。

「ど、土井さん!？」

「いやああああああああ!？」

土井が、手を上げて、振り下ろす。

主砲から、ビームが照射される。

ビームは、狙い過たず、夢子だけに直撃して、校舎ごと吹き飛ばす。

「夢子ちゃん!？」

「夢子ー!？」

守と日灯の声が重なる。

不思議なことに、守は全く無傷だった。

「まずいな。実にまずい」

風見が、両手の拳を握りしめ、言った。

「もう、誰であれ、見境なしだ。このままでは、私達も……」

「うわああああああああ」

「きゃああああああああああ」

学校中から、悲鳴が聞こえてくる。

ビームは降り注ぎ、学校が破壊され続ける。

他にも、次々に、攻撃の犠牲になっているらしかった。

「言うておくが」

風見が、日灯に言った。

「これは、夢子と日灯のせいじゃないか。私は関係ないね」

「ちょ、この期に及んで何よ、その発言は！」

「だって、草場君を傷つけるような魔法を使ったのは君達だろう」

「何よ、あたしが悪いっていうの！」

「お、落ち着いてよ、2人とも。今はそんな場合じゃないよ！」

言い争う風見と日灯の仲裁を、守がしようとするが。

日灯は、風見に掴みかかっていった。

「ええい放せっ、誰だって命は惜しいんだ！」

「風見、あんた、昔っからそういう奴よね！」

「やめろ、私は逃げさせてもらう！」

「あたしだって逃げたいのよ！」

「じゃあ、放せ！」

こうして、風見と日灯がもみ合っていると。

土井が、2人に視線を向けた。

「草場君を傷つけるのは……」

「あ」

「う」

風見と日灯が、硬直した。

「誰であっても、許さないッ！」

ビームが、照射された。

「きゃあああああああ!？」

「うわあああああああ!？」

日灯と、風見は、そろって直撃を受け、ぶっ飛ばされた。

学校中がパニックであった。

生徒も教師も、逃げ惑っていた。

「土井さん！」

守は、必死に走った。

校舎の中をなんとかすり抜けて、校庭に走り出る。

校庭の空中には。

巨大な、機動城塞が浮かんでいた。

その上に、土井が、乗っていた。

とても、非現実的な光景だった。

今まで見てきたどの魔法の中でも、一番だった。

「土井さん、もうこんなことはやめて！」

「でも、このままじゃ、草場君が」

土井が、首を振った。

「このままじゃ、草場君が、傷つけられる。だから、おおもとをやっつけない」と

「や、やっつけなくていいから！」

これ以上、何をするつもりなのだろう。

おそらく、学校そのものを破壊しつくすまで、止まらないのではないだろうか。

そんなことを考えつつ、守は、機動城塞へと駆け寄る。

幸いなことに、守には攻撃は飛んでこない。

でこぼこの地面を駆け抜けて、守は、機動城塞に迫った。

「俺は大丈夫だから！」

「草場君!？」

「それより、早く、機動城塞を……！」

守は、機動城塞へと跳躍した。

「ぐっ！」

そして、なんとか、縁の部分へと、しがみついた。

「草場君！」

土井が、城塞の上を駆け下りてくる。

「だ、大丈夫、だから……」

守は、両腕の力を振り絞って、身体を城塞の上へとのせた。

そして、そのまま立ち上がり、駆け寄ってきた、土井を抱きしめる。

「草場君、こんな危ないこと……」

「こっちの台詞だよ……」

土井の発言に苦笑しつつ、守は言った。

「さっきも言った通り、俺は、大丈夫だから」

「本当に？」

「ああ、本当だよ」

「怪我、してない？」

「うん、してないよ」

小柄な土井を抱きしめたまま、守は、努めて穏やかに言う。

多少すり傷などはあるかもしれないが。

どこか、ひどく痛いところがあるわけではない。

「土井さんは、俺のことを考えてくれた……んだよね？」

「……うん」

土井は、小さくうなずいた。

「草場君、皆に迫られて。草場君のこと、傷つけてたから……」

土井は、悲しそうな表情で言った。

「大丈夫。俺は、平気だから」

「……本当に？」

「うん。慣れたっていうか。土井さんが心配するように、傷ついても、いないと思う」

「……」

土井は、沈黙した。

しばらく、土井は黙っていた。

守も、黙って、土井を抱きしめていた。

やがて、機動城塞の色が薄くなっていった。

そして、そのまま、色がなくなり。

透明になって、消えて行った。

「あ……」

気が付くと、守と土井は、地面に立っていた。

破壊の痕跡は、まだありありと残っていたが、とにかく、機動城塞は消えたのだ。

「た、助かった……」

守は、安堵のため息をついた。

「好き」

土井が言った。

守の至近距離に、土井がいた。

気がつけば、まだ抱き合ったままだった。

「私、草場君が、好き」

「うん……」

守は、うなずいた。

そして、土井の告白に、笑顔を返した。

「俺のこと、好きでいてくれて、ありがとう」

「うん」

土井も、笑顔でうなずいた。

「私、草場君の答えが、どんなものであってもかまわない」

土井は、決意を秘めた瞳で、言った。

「……それはすごく怖いことだけど」

守の腕を握る力を少し強くして、土井が、続ける。

「でも、草場君が幸せでいてくれたら」

(あ……)

守は、土井の笑顔を見て、改めて思った。

(やっぱり、すごくきれいだ)

守は、しばらくの間、動けなかった。

(きれいだよ、土井さん)

守は、心の中で、そう、土井に語りかけた。

すさまじいことが次々に起こり、学校は崩壊の危機に見舞われたが。

翌日は、何事もなかったかのように、普通だった。

「え、なんで……」

守は、呆然とした。

学校は、あんなに破壊されていたのに、元通りになっていた。

グラウンドも、穴だらけになっていない。

「いやー、大変だったな」

「あ、鈴木！」

守は、鈴木に気づいて、話しかける。

「なあ、昨日のこと覚えてるか？」

「うーん。いろいろあったけど、一番でかいのは、たしか、城からビームが発射されたことだよな。俺もぶっ飛ばされた気がする」

「ああ、やっぱ、覚えてるんだ……」

「でも、皆、気にしてないみたいだな」

「そうだな」

あれだけのことがあったのに、皆、普通に登校してきている。

そこに、4エレメンツがやってきた。

まるで、守を待ち構えていたかのようにだった。

「昨日のことなら心配いらないよ」

風見が言った。

「ゾディアック・ラブ・ウォーズの約束事として、なるべく周囲に被害が及ばないようには努力してるの。まったく、学校修復するの、大変だったんだからね」

日灯が、不機嫌そうに言った。

「学校、修復したって……」

たしかに、破壊できるのだから、修復もできるのかもしれないが。

日灯の何気ない発言に、守は改めて驚いていた。

「これからも、魔法で変なこと起こると思うけど、多少変なことは、皆、あんまり気にしないようになってるから」

夢子が微笑した。

「そうなのか？ なんだか怖いな」

守は、夢子の発言に、さらにちょっと衝撃を受ける。

「まあ、魔法をガンガン使っているんだから、それに対する反動もなんとかしないといけないわけだね。大きな魔法に対する反動はそれなりに大きいわけだが」

「……」

土井が、風見達から視線を逸らした。

「まあ、心配はいらない。数年おきに繰り広げていることだからね。この学校や周辺の住人の皆さんは慣れていると言っていい」

「そ、そうなのか？」

「草場君は高校からの外部受験だったね？」

「あたし達は、付属の幼稚園や初等部からずっと一緒だけど、数年おきに高校でいろいろあるって話は聞かされてたわ」

「うん、高校とは離れた校舎だけど、噂は流れてきてたよね」

4 エレメンツが、口々に言う。

「だから、内部進学の子供、半分くらいは、このイベントについて、『そういうもの』だと思っっているというわけだな」

「そうだったのか……知らなかった」

守は、いまさらながら、他の生徒達の順応性の高さに納得した。

「まあ、少なくとも俺も、けっこう慣れてきたし。がんばれよ」

鈴木が、守の肩を叩いた。

「うん」

そう答えつつ、守は、残りの魔法のことを考えていた。

(次は、水瓶座か……どうなるんだろう)

その日は、朝からは事件のようなものは起きず、昼休みになった。

「草場君」

風見が、ひょいひょい、と守を手招きする。

「なに？」

「ちょっとここでは微妙だな」

教室の入り口に呼ばれた守に、風見は言った。

「5階の空き教室に来てくれないか」

風見の言われるまま、守は、空き教室へとやってきた。

風見は、窓際にもたれかかって言った。

「さて、本題だが」

窓から、風が吹いて入ってきた。

「草場君に、これをのんでもらいたい」

風見は、どこからともなく、ゴブレットを取り出し、守に渡した。

中には、白っぽい色の液体が入っていた。

甘い香りがする。

果物のような香りだった。

「なにこれ、ジュース？」

「いや、これは、神々のネクターだ」

風見が言った。

「これは、『風の星座 固着宮の魔法 神々のネクター』……私が、最後に君に使う魔法だよ」

「それって、どういう……」

守の問いに、風見が、真剣な面持ちで言った。

「これを飲めば、君は、魔術師になれる」

「魔術師？」

「私達と同じ存在になれる、ということだ」

教室のカーテンが風になびいた。

「五十嵐さん達と同じ、って、つまり」

「ああ。君は、4つのエレメントに干渉し、いずれかの力を行使する魔法使いになることになる。あるいは、君であれば、特定のエレメントによらず、すべての属性の魔法を使うことができるようになるかもしれない」

「え、俺が？」

「そうとも。私達の行っている、魔術による世界の改変や、君自身への直接の働きかけをもっても、平然と自我を保っていられる。これはすごいことなんだ」

風見が言った。

「君は、私達から逃げなかった」

「五十嵐さん……」

風見は、うなずき、言った。

「ああ、そうだよ。私は君が好きだ」

風見が、守を見すえる。

「いろいろ考えたが、私が君のことを好きなのは事実だ。それが論理的な判断というものだ」

風見は、肩をすくめてみせた。

いつものように。

「本当に、いろいろ考えさせられたよ、君には。私は、ゾディアック・ラブ・ウォーズでの勝利を望んで、この高校に入った。……最初は、対象のことなど利用してやるつもりだったんだがね」

驚いて見つめ返す守に、風見は苦笑いした。

「そう、悪く取らないでくれよ。これは、一人前の魔術師になるための儀式だと、そう考えていた。だから、対象のことは、きちんと保護しようと、そう考えていたのさ」

「五十嵐さん」

守は、風見が、自分が嫌われる可能性を覚悟して、真実を打ち明けてくれているのだと理解

した。

「だが、君に出会って、そういう気持ちは吹き飛んでしまった。私が考えるより、ゾディアック・ラブ・ウォーズの儀式魔法の効果は強かったということかな」

風見は、気持ちを自ら整理するように、言葉を重ねていく。

「私が、いつ、どの段階から、本当に、君を好きになっていたかはわからない。だが、魔法など介在しなくても、現実の恋愛はそうだと聞き及んでいるが」

「聞き及んでいるって、五十嵐さんらしいね」

守は小さく笑った。

「ああ、私が、誰かに対して、ここまで強く何かを想うことが、今でも信じられない気分だよ。もっと、論理で割り切れる世界、それが、いままで、私に見えていた風景だったからね」

そして、風見は、小さく息をついた。

「そう思ったからこそ、君のことを本気で好きになったからこそ、ゾディアック・ラブ・ウォーズでの勝利を、とも思ったが」

風見は続けた。

「草場君、これでは、君が巻き込まれているだけだとも思ったんだ」

「俺は……」

たしかに、守は、このゾディアック・ラブ・ウォーズに巻き込まれた。

4 エレメンツに振り回された。

「でも、それじゃ、あんまりだと思った。君自身のことも、私の……日灯や夢子、土井の気持ちもね」

風見は、宣言した。

「だから、ちゃんとした答えがほしい。君に、ゾディアック・ラブ・ウォーズの、恋愛争奪戦の相手ではなく、私達と同じ存在になって、返事が欲しいんだ」

風見は、ゴブレットを差し出した。

「だから、これを飲んでほしい。そうすれば、君は、私達と……」

風見は、守を見つめ続けた。

守も、しばらく、そのまま、風見を見つめ続けた。

かなり長い時間、そうしていた気がする。

先に口を開いたのは、守だった。

「いや、俺は、普通の人間のままでいいよ」

風見は、衝撃を受けたようだった。

「どうして！」

風見は、守に詰め寄った。

「どうしてだ、草場君。そうすることで、君は、この混乱から脱することもできるし、自分の意思で、選択することだって……」

「いや、違うんだ」

守は、穏やかな声で言った。

「俺の選択なんだ。五十嵐さん」

「君の選択？」

不思議そうな顔の風見に、守は続ける。

「うん。俺は自分でこうすることを選んだんだ」

守は、苦笑交じりの微笑みを浮かべた。

「自分でも、なんで、そんなこと決意したかわからないよ。だけど、五十嵐さんの話聞いて、俺、改めて思ったんだ」

守は、真摯な瞳で言った。

「もしかしたら、ズルいのかもかもしれないけどさ。俺、このゾディアック・ラブ・ウォーズ、最後まで見届けたいんだ」

「どうしてだ？」

風見の問いに、守は静かに続ける。

「うまく言えないんだけど、皆が俺に魔法を全部使ってくれてさ。ゾディアック・ラブ・ウォーズのパワーを全部使いきったら。その時は。別の方法で、皆が幸せになれる方法、あるんじゃないかって」

「草場、おまえは」

風見は、嘆息した。

「どれだけいい奴なんだ。この、ゼロサムゲーム、ひとつのパイを奪いあう戦いで、皆が幸せになる方法なんて……」

「あると思うよ」

守は言った。

「だって、魔法なんだから？」

守の言葉に、風見は、小さく笑った。

「そうだな。もしかしたら、そんな魔法もあるのかもしれない。……あるといいな」

風見は、ぱちんと指を鳴らした。

もう片方の手に持っていたゴブレットが空中にかき消えた。

「だが、すでに、イレギュラーな現象は起こってるよ」

風見が守を改めて見すえる。

「君は、私の魔法を拒んだのだから。あるいは、君が言っているような方法が、見つかるかもしれないな」

風見は、左手の拳を握り、言った。

「これは、すごいことなんだぞ。君は、私の魔法の実現を拒んだんだ。私が世界を改変しようとする力に対し、意志の力で抵抗した。あるいは、君は、私が思っていたより、本当にすごい奴

なのかもしれないな」

「そう、なのかな？」

守は頬をかいた。

「すごい奴はだいたいそういう態度をするものだよ。ああ、いやだね」

風見が、やれやれと首を振った。

「だが」

風見は、もう一度、守に言う。

「約束だぞ、草場君。ちゃんと、私達に答えを告げること。君がそう、決意したからには。それを……」

「うん、わかってる」

守は、微笑を浮かべ、うなずいた。

「風見さんの気持ち、うれしかったよ、ありがとう」

「あ、おい、今、名前……」

風見が、守にそう問い返した時。

「やっと見つけたぞ！」

日灯が、教室に飛び込んできた。

夢子と土井も、それに続く。

「てめー、風見、また出し抜こうとしてるな！」

「ひどいひどーい！」

「……悪だくみ」

風見に詰め寄る3エレメンツを、風見は軽く手で制する。

「私は何もしていないよ、なあ、草場君？」

「あ、うん、風見さんは、なにも」

守がうなずく。

「ちょ、草場！」

日灯が聞きとがめる。

「なんであたしは『火野さん』で風見は『風見さん』なんだよ！」

「あ、ごめん、日灯ちゃんも、これから名前と呼ぶよ」

守の発言に、日灯は、盛大に咳き込んだ。

「何を動揺しているのかね、日灯。自分で言ったんだろう」

「うるせーよ、風見！」

「それより、守君、何かされてない？ほんとに？」

「うん、されてないよ」

「ほんとに？薬とか盛られてない？」

「そんなことするはずないだろう、夢子じゃあるまいし。なあ、草場君」

「はは……」

守が苦笑する。

「ねえ、あれ、絶対何か隠してるよね？」

「ああ、絶対、そうに決まってる」

夢子と日灯が、うなずきあう。

「……成敗」

土井が、ぎらり、と目を光らせた。

「わ、やめろ、君達！」

「わー、みんな、落ち着いて！」

そして、3エレメンツに、風見と守はもみくちゃにされた。

大騒ぎの中、守は、ふと、思った。

(ゾディアック・ラブ・ウォーズも……あと少し、なんだよな)

第12話 魚座の巻

しばらくは、平穏な日々が続いた。

守の周囲では、大きな事件らしいことは起きなかった。

それまでのドタバタが、嘘みたいな感じだった。

もちろん、4エレメンツは、何かと理由をつけては、守にまわりついてきていた。

しかし、誰も魔法を使うことはしなかった。

それが、なんだか新鮮で、不思議だと、守は思っていた。

「え、魔法？」

日灯が、守に問われて言った。

「あたしのは打ち止め。こないだ言ったでしょ」

「.....私も」

土井も頷いた。

「あと、魔法が使えるのは、夢子だけだ。十二星座、最後の星座.....魚座の魔法だな」

風見が言う。

「魚座の魔法か.....」

守は考え込んだ。

守は、夢子の方が実はずっと気になっていた。

(また、自暴自棄なことしないといいんだけど.....)

蟹座の魔法や蠍座の魔法のことを思い出し、守はそう考えた。

ふと、携帯が着信した。

夢子からのメールだった。

「放課後、屋上で待っています」

そう書かれていた。

守は、屋上に向かった。

(これって.....)

ついに、最後の魔法が使われるのだろう。

それは、きっと間違いない。

屋上の扉を開けると、夢子が、屋上の真ん中に立っていた。

夢子は、柔らかい笑みを守に向けた。

「来てくれてありがとう」

「うん」

守は、うなずき、夢子へと近づく。

夢子は、穏やかな口調で、言った。

「私、草場君のことが好き」

「……うん」

それは、いつもの夢子の発する言葉とは異なっていた。

いつものテンションの高い言い方でなく、しみじみと、そう言ったのだ。

「でも、私、日灯ちゃんも、土井ちゃんも、風見ちゃんも、みんな好きなの」

夢子は、優しく、いつくしむように言った。

「私達は、幼なじみだった。幼稚園のころから一緒の。ほんとにいつも、何をするのも一緒で。たくさんの方があった。笑ったり、ケンカしたり、また仲直りしたり。私達4人はいつも一緒だった。本当に、大切な人達なの」

夢子は、多くの時間を、過ごした友達の思い出を語った。

幼稚園も、小学校も、中学も、ずっと一緒だった日々のことを。

守は、夢子の深い愛を感じながら、その話を聞いた。

「だけど、草場君が選べるのはひとりだけ。……それでも」

夢子の、両手が、きらきらと光りはじめた。

「私、草場君に、自分の気持ちを全部伝えたいから！」

光の渦が奔流のように溢れ出す。

「だから、使うね。私の最後の魔法。この、ゾディアック・ラブ・ウォーズの最後の魔法。魚座の愛の魔法……『水の星座 柔軟宮の魔法 ラブ・オブ・オーシャン』を！」

世界が、水につつまれた。

愛の洪水だった。

守と夢子は、その中にとけていった。

（夢子ちゃん……）

空を飛んでいるような感覚だった。

守は、夢子だけでなく、水の中に、誰かを発見した。

土井だった。

そして、日灯。

風見も。

さらには、鈴木と、クラスメイト達も。
先生達も、学校中の生徒達も、そして、学校そのものも。
全部、水の中につつまれていた。

街も、また、あふれる水につつまれ、みんな、みんな、とけだしていった。

(守君)

夢子の声が聞こえた。

(魚座の魔法は、自他の境界をなくしてしまうの。境界がなくなれば、私達はひとつになれる。皆を愛することができる)

(ああ、そうか……)

守は、夢子の想いを受け取った。

これが、水の魔法の力なのだ。

深く、強すぎる愛の力が、これまでは暴発していただけなのかもしれない。

しかし、入れ物がなくなった時、水はあふれ、世界を覆い尽くす。

(守君、好き)

夢子の声が聞こえた。

(……草場君のことが、好き)

土井の声も響いた。

(私が、草場君を支える……助ける。どんな時も)

(土井さん)

土井の決意が伝わってきた。

(好き。……愛してる)

(草場！ 好きだ！)

日灯の熱を帯びた声が聞こえた。

(あんたみたいな、ヘタレで、優柔不断で、めんどくさくてうっとおしい奴、すっげーイライラする。でも、おまえみたいな優しい奴、見たことねえよ)

(日灯ちゃん……)

(だから、あたしは、あんたのことが好きだ！)

(草場君。君のことが好きだ)

今度は、風見の声が聞こえる。

(もっと、君のことが知りたい。草場君のことを理解したい。そして、私のことも知ってほしい。理解してほしい)

(風見さん)

(好きだよ、草場君)

(守君、あなたなら、私を、私達を)

夢子の声が聞こえる。

(私達と世界を受け入れてくれる)

(.....買いかぶりすぎだよ)

(ううん、そんなことはない。あなたなら、すべてをきっと受け入れてくれるはずだもの。そして、私も、すべてを受け入れるつもり)

夢子と、土井と、日灯と、風見の、守への想いが伝わってくる。

楽しさと、切なさ。

そして、不安と期待。

すべての想いが、奔流となって、守に流れ込む。

(ああ)

守は、その想いを、全身に感じた。

(受け取ったよ。ありがとう)

守は、上を見上げた。

明るい光がさしている。

きっと、向こうが海面のはずだ。

そちらを目指して、守は泳ぎ始めた。

「夢子ちゃん！」

海面に出た守は、夢子を呼んだ。

世界は、海に覆われて、空と海しか存在しなかった。

目の前には、大きな魚がいた。

その背中に、夢子が座っていた。

「夢子ちゃん」

ゆっくりと、近づき、守は伝える。

「ありがとう。俺を愛してくれて」

守は、想いを噛みしめながら言った。

「こんなにも、俺を愛してくれて、ありがとう」
自分自身も、大きな愛の気持ちを込め、守は言った。

「土井さんも、日灯ちゃんも、風見さんも、ありがとう！」
守は、深い感謝の気持ちにつつまれていた。

「俺、いままで、何のとりえもない奴だと思ってた。取るに足らないような存在かもって思ってた。でも、でも、ゾディアック・ラブ・ウォーズが理由だとしても、皆が俺を愛してくれたことにはかわりはないから」

だから、と、守は続けた。

「俺は、皆のこと、普通の女の子してみたい。魔法とか、そういうの関係なく。なんていうか、ワガママかもしれないけど、普通の学園生活、送りたいんだ」

「守君」

夢子が、瞳を潤ませて言う。

「そうすることで、もしかしたら、俺も、自分で決められるかもしれないって。皆の気持ちに答えて、どうするかを決められるかもしれないって。そう思ったんだ」

守は、天を仰いだ。

「俺の魔法、使えるかな、一度だけでも」

(ああ、そうだな。使えるかもしれない)

風見の思念が、全員に飛び込んできた。

(あるいは、あのネクターの効果は、こうして現れたのかもしれないな。たとえ、飲まなかったとしても、魔法を発動させただけで……)

「私は、皆を愛したい！」

夢子の思念が、全員へと届く。

「皆が、幸せになる世界を！」

守の想いが、夢子の魚座の魔法と合わさる。

そして、想いが、光の奔流となり、再び、世界へとあふれていく。

守が気が付くと、全員が、放課後の教室にいた。

戻った世界では、さきほどまでの、魚座の魔法は片鱗もなくなっていた。

日灯も、土井も、風見も、夢子も、どこか照れくさそうにしていた。
守も、同じ気持ちだった。
お互いの気持ちがわかった後だったから。

「なあ、草場君」

風見が、すっと顔を上げて言った。

「……星座の魔法が、螺旋を連なって続いていく、って、知ってたか？」

その言葉を受け、日灯が、ニッと笑った。

「実は、あたし、新しい力がみなぎるのを感じてるんだよね」

両手を握ったり開いたりさせながら、日灯が言う。

「え、じゃあ、つまり、また最初から？」

夢子が大きく目を見開いた。

「また、最初から、星座の魔法、始まるってこと？」

夢子に、土井が、こくりとうなずいた。

「……草場君を、振り向かせられるまで」

「え、普通の学園生活じゃ……」

守は、おろおろして言った。

「俺、そう願ったつもりだったんだけど」

「ふむ、わかっていないね」

風見が言った。

「十二星座の魔法、このゾディアック・ラブ・ウォーズをリセットさせただけでもすごいことなんだぞ。それに、君はネクターを飲まなかったからな。さっきのあれは魔法ではなく、想いの奔流だ」

「え、何それ、俺、魔法使ってないの!？」

「そうとも。あーあ。私の提案を受け入れないからだよ」

「そんな、さっきと言ってたこと違うじゃないか！」

守が、あせって叫ぶ。

その様子を見守っていた夢子が、ぼそりと言った。

「なんか、風っぽい発言だよ、風見ちゃん」

「そうそう、言葉でごまかすっていうか」

日灯もうなずく。

「……信用ができない」

土井がダメ押しした。

「散々な言われようだな」

風見は、一同を見回し、続けた。

「まあ、いい。もう、戦いは始まっているんだ」

「それじゃ、また、突撃！」

日灯が守に飛び掛かる。

「……また、牡羊座の魔法」

「ふむ、今度はどうするのかな」

「え、待って、守君ーっ！」

「うわあああ！」

こうして、守と、4エレメンツの学園生活。

ゾディアック・ラブ・ウォーズは続いていく。

ゾディアック・ラブ・ウォーズ

<http://p.booklog.jp/book/71481>

著者：森水鷲葉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/morimizushuba/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71481>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ